……此より後は傳承者も忘る……

7

エッチョ様コメコはどだばだどん
あら町横町に餅買ひに
其の餅ねれだら持てごされ
一いや、二ふ……（中略）……九、十お
すとんと返しぇば一チョ貸した。

8

おらがうしろのチャ〳〵の木に
雀が三羽とまりたが
長々すすめの言え事は
筵三枚ござ三枚
六枚屏風を立で廻し
ようべ來た嫁花よめご
キンタンドウスをノマせだら
ぼろりしゃらりと泣がしゃろが
何が悲しょで泣がしゃるや
おらが弟のシェンマヅは
七つ八つから金山へ
金が出だやら死んだやら
一年もえだ（註）ども未だも來ね
二年もえだども未だも來ね
三年三月やーの九十九日
親の手許がらホミもろだ
錢が五貫に小判が揃ふだ
つれでただれや姉ご様
つれでがたども何着しぇで
下に白無垢、中しぇに小袖

上にとび色のオグジマ帶よ
前で結んで後で下げる
此所で一ばん岩船で二番
サドで三ばん塗緒のせぎだ
なじだ金緒のせぎだでも
たまらなえ一チョ貸した。

〔註〕もえだ＝經過した。

（以上、佐藤ヤオ女）

9

ミーミーワサンジョ
ヘンゴグ〇〇（註）

〔註〕〇〇の所へ相手の名を入れる。そしてその相手に毬を引き渡す。

10

オシロンセア
オンサマダエショガ
オカゴデエッチョフギ
エッチョサマドン
サエダカドン
シナジカドン
コーゴワクマバノシャガミカドン
一や二う……（中略）……九、十お
すとんとかーへば
一チョ貸した。

11

コノサカチュタノムスメ
キタ米屋ノ米粒サドヤノサドエッショ

オモーシマショトユーナラ
コノヨノオナカニナリマシタ
ハトメハトメエビスコニ
ヨバレテマエッタラ
ハクヤノハマヤクスズメノヤケド
十ゼン一ゼンシマショウ
二ゼンシマショ……（中略）……
十ゼンシマショ
マズマズ十ゼンタベマシタ
タベマシタ。

以上の手毬唄の中で、1から6までは、私の母などが子供の時も知らなかつたと云ふ。7、8は私達も知つて居るが、今は餘り聞かないやうである。9、10は今も唄はれる。11は私達の時には無かつた。隣の子供に聞いたのである。

○お手玉唄（お手玉はチャックと言ふ）

1

吸れすすれや十ペァもすすれ
一ペァ二ふァ……（中略）……十ペァ

2

お一づオロシテオサレァ
……（中略）……
此の衆に一チョ貸してオサレァ

3

一だ二だ三だ四だ五だ
六だ七だはちゃ九十百だ。

4

一づガンガラビの木、一づ
二つセァンショの木、二つ
三つ蜜柑の木、三つ
四つヨズの木、四つ
五づ公孫樹の木、五つ
六つモグデの木、六つ
七づナリテンの木、七づ
八つヤショーの木、八つ
九づコーメの木、九づ
十で收めであつちギャレこつちギャレ
一チョ貸した。

○其の他の童詞

○お月様カラ様
おめァ小っつえ時は
オヘンコに負あつて
油屋へ油買んに行つたば
油屋の戸の口で
すっぺり返つてドンげぁつて
油一升こぼした
其の油どした
犬皆なめだ
其の犬どした
太鼓の皮に張つた
其の太鼓どした
よべなの踊にぼこした、ぼこした。（註）

〔註〕ぼこす＝こわす。

○烏、烏。
汝家焼げだ。早よ行つて水掛げれ、
水掛げれ。

○とんびトロロ
猫のまんまこぼして、
お父さん(註)にたげれァつて
アーンアーン

〔註〕たげれァつて＝叱られて

○猿けっつ眞赤だ。どんぼ焼えで
おっつとんだ。

○牛つめ割れだ、大川こげね。
アガメンノメー。(祖父の少さい頃はベゴ爪割れだ……
と言つたと)

○おぢごんぼ(註)1
めえやぐた。
へんちえん柱(註)2で小屋建でで
麻幹三本で屋根葺えだ。

〔註〕1　おぢごんぼ＝一番末の男子。
〔註〕2　へんちえん＝雪隱

○一人二人三メの子
四にヨツテヨメの子
橋の下の糞掻ぎ棒
かえでもかえでも掻げねで

粥なめだ。

〔註〕此は、數人集つて居る時に、一人づゝ此れを唱へ「粥なめだ」が當つた者を嘲ふ。

○福、德、貧乏、金持、どんぞ。

〔註〕此は着て居る着物のかぞへ方、卽ち、三枚着て居れば「貧乏」で四枚なら「金持」

○かくれんぼの鬼の決め方。
カクレンボ、ヤマサンボ、ベンギリ、タンギリ、
ソーログ、ソッテァ、ボッテァドン。
此の「ドン」が當つた者は鬼でないから除外して
又「カグレンボ」を操り返し最後に殘つた者が鬼。

○「ジョーリ隱し」の「ボンサ」の決め方。
ジョリガグシノ、メッテァボワ、エゲノハダノ
シャボンワ、ヒレァダリ、ツボンダリ、オラマク、
シラネ、シラネ。

〔註〕「ジョーリ隱し」は、自分の履物を隱して「ボンサ」になつたものにさがさせる遊びである。此の「ボンサ」を決める時、各自の履物を出してならべ、右の文句を唱へながら、前の「かくれんぼ」の時のやうにする。皆、かくして仕舞ふと「ボンサ」は目をあけ、さがし始める。外の者は、
「ボンサ〳〵。ジョーリ買うで濟されなされ」とはやす。

○デァ〳〵コグゾ。
デァ〳〵コグゾ、デァコグゾ
仕舞のコグゾは痛でコグゾ。
此はヨロギ又はヨロブヂ(兩者共意味は同じ。ゐろりの緣

の木のこと）等に手を握つて置き、それを他の者が右の文句を言ひながら輕く叩き、「痛でコグゾ」の時に强く叩く。それをウマク外す遊び。

○オキゲァチョ、キゲァッチョ、
よべ吹いだ風は
オギへ聞けで
オギのオバは
も一けぁりにけぁりませう。

〔註〕オギ＝沖。又、オギと云ふ所もある。けぁる＝ころぶ。
此は主に、幼兒が二人手をつないで、手をブラ〳〵させ、「けぁりませう」で手の間をクルリとくゞるやうにする。

○カンコベロベロ、屁ふた方へチャト向げ。

〔註〕細い棒の先を折りまげ、又は鉤なつて居る柴などを掌でクル〳〵廻し、其の先が當つた者が犯人。主に幼兒。

○水泳の時の唱へ事
お仕舞の、河童に、ケッチョに、
取れぁんねように。
水から上る時に、此を唱へながら二、三べんチャポ〳〵する。主に女の子や、ごく小さい子。
又、深い所へ行く時は
へ（背か瀬か？）立ぢヤマベ
と言ひながら入る。

○ほたるを取る時の唄
ホーチョ來え、ヤマドリ來え。
胡瓜の花も咲えだし
南瓜の花も咲えだし

ホーチョ來え、ヤマドリ來え。

〔註〕ヤマドリ＝大きい螢。
尙、此の外「茄子」「夕顏の花」なども「咲えだし」と言ふことがある。

○手をパチ〳〵打ち合ふ遊びの唄
エッサンセァ
一に橘、二にかきつばたネ、つばたネ
三に下り藤、四に獅子牡丹ネ、牡丹ネ
五つエヤマの千本櫻ネ、さくらネ
六つむらさき色よく咲いたネ、咲いたネ
七つナリテン、八つ山吹の木、ぶきの木
九つ小梅に十にトノサマの木、サマの木
セッセッセ、パラリとセ
マルヤマトンテンカンで
東山見ればネ、見ればネ
オサヨさしたの黃金の櫛はネ、櫛はネ
誰に貰うたか、ゲンジロさんに
貰うたがネ、もろたがネ
ゲンジロ男はハゲチョで
困るはネ、困るはネ
そこでオサヨさんは
涙がポロ〳〵、ポロ〳〵
其の涙を袂でふきませう、ふきませう
ふいた着物を盥で洗ひませう
洗ひませう
洗うだ着物を、竿に掛け乾しませう
乾しませう

○同

乾した着物を、ゲンジロさんに
着せませう、着せませう。

〔註〕此れは、文句の終りに、色々なしぐさをする。
右の二つは、主に女の子がやる。私達の子供の頃は聞いたが、今は餘り耳にしない。

○小石を持つて、宙でつかむ遊びの唄

トゴ、タゴ、トゴロモ、ツエダ、ネッチヤン、キツネ、ハッチャン、コチャコエ、トゴノゴ、タゴ、ジッペン、クレチャ

○猫ジヤ

猫ジヤ猫ジヤ、どの猫欲しや。
後の○○（人名）猫欲しは。
何食して置ぐや。

サド（砂糖）に罐詰、お菓子のこぼれ。
そっても足らね。
小屋フト（程）食はしぇる。
そっても足らね。
家フト食はしぇる。
そっても足らね。
川フト食はしぇる。
そっても足らね。
海フト食はしぇる。
そっても足らね。
天チョク（天上）フト食はしぇる。
さうだば良は、取れだば呉れる。

○山の山のお母さん

海越えで山越えで山の山のお母さん、居だがねエ。
今、顔洗ったエシ。
ネブスケコギ（朝寝坊）だね、ネブスケコギだねエ。
海越えで山越えで山の山のお母さん、居だがねエ。
今、白粉つけったエシ。
おしゃれコギだね、おしゃれコギだねエ。
海越えで山越えで山の山のお母さん、居だがねエ。
ほら居だぞッ。

〔註〕右の二つは問答にして遊ぶ。主に女の子がする。近所の子について驗して見たら、私達の時と同じだった。

○ケラコ（けら）を捕へた時

ケラコ、ケラコ。
姿マンジョ、どらばた（どの位の大きさ）ンだ。

○ハダオリ（水かまきり）を捕へた時

オバ〳〵機織れ。
オジャ〳〵木割れ。

○ケッケババ（翁草）の雌蕊をまるめて、毬を作る時

ケッケババ下なれ、モシノゴ上なれ。

ものがたり

○そーれものがたり語りそーろ。
正月、一日二日の事なれば、小豆の餅とシロコの餅、座敷論とも聞えたり。
それ、
シロコの餅の申せしは、小豆の餅のぶんとして、
うわ座するとはきっくわえなり。
それ、

ぶでえ、叩げ、した座へ引ぎ下れとありければ、小豆餅はつら眞赤にして下座へ引ぎ下る。

それ、

なとーの糸シゲが、ノガ屋(註)1の隅へと晝寢(ひるね)して、パツト目をさめ、シオエの兜をザッフリかぶつて、サハヂ(註)2の小馬に打乘つて、セッカエ(切匙?)べらを薙刀に、オシギ(註)3がバンバ(註)4へ乘り出だす。

それ、

そごもどに進み出でたるツバモノは、如何なる者とぞ思ふらん。チヂのサンナン、豆の二スケとは我が事なり。出でて勝負々々と大音あげて、箸のハンノジョウ、奥歯のオクジロー、舌のシンスケを集まつて、あなたには槍、こなたには槍、喉のホソドまでカリ込んだ物語。

(註)1、屋敷の隅にある、籾殻を置く所。板や藁等で圍ふ。

「屋」とは見られぬやうなもので、屋根も無い。

2、淺い、大きな、瀬戸物の鉢。

3、折敷であらうか?傳承者は「御馳走の出て居る所」と解釋してくれた。

4、馬場?

○そーれものがたり語りそーしろ。

(註)1 テンポ元年猫の年、近江の湖火がついだ。(註)2キンカ聞ぎつけ、目ぐらが見つけ、手無しもみ消し、足無し走り着ぐ時、(註)3メメズの骨が(註)4ブンノクトの爪先から足の爪先まで、ズクズクンとたつて、醫者やテンシヤ搖がせ共取れず、手杵でこねだ共取れず、一夜作りの辛酒と、三年作りの甘酒と、(註)5ダオの黑羽根からすの白羽根、猫の羽根もてペタペタペッタとつけだば、直ぎに取れだ物語。

(註)1、「テンポ」には、方言で「嘘」と言ふ意味がある。此の場合も其れを利かせて居ると思はれる。

2、方言。つんぼ。

3、みゝず。

4、普通は「ボンノクト」と云ふ。ぼんのくぼのこと。

5、白い水鳥だと云ふ。今は居ない。

○……(傳承者も憶えなかつた)……

雁の左の翼にハッシリ當り、雁は驚ぎ、ガッサンボロリン、ガッサンボロリンと、ほろぎ出す。小鮒まざりの小雜魚、七、八斗ばかりほろぎ出す。……(以下、又傳承者忘る)

(以上、丹マッ女)

右の中、最後のものは、傳承者も全部暗記しなかつたと言ふ。此れは、若い時、館腰村瑞雲の「キチエム」どんの姿樣に習つたのださうである。

鳥さし舞

鳥さし舞は、「大神樂」の時にやつたと云ふ。大神樂と云ふのは、獅子をかぶつて舞つたり、三番叟をやつたり、手品をやつたりする。今でも時に來ることがある。

もとは村の者で一座を組んでやつたと云ふ。

此の鳥さし舞は、鳥さし一人、天狗一人、ヤッコ二、三人が登場し、外に座元が三味をひいたりし、鳥さしは笠を持ち、竹を手に、扇子を襟にさして出、文句に相應した所作をやるのだと云ふ。

鳥さし

東國から鳥さしが參りました。大鳥(おほ)では雁、白鳥(はく)。

こー鳥ではミソサザエまで刺してお目にかかりませう。

座元

さしたりヨ、さしたりヨ。

鳥さし

さしたり良げれば、テンミョのタエシの御山の、ヒモドをさして下はれば、エダヤ小鳥の舞ひ遊び、シッチグ、ハッチグ、カラ竹よカラリンと、取り直し此の調子にかんまへて、一さし刺しませう。

座元

さしたさした、ミサエダ。

鳥さし

若鳥さしたミサエダ。

座元

とでも刺すなら、二日もさしませう。

鳥さし

二日の日は又、日は又二日。

フタバ峠を刺して廻れば、松の枝に小鳥一羽、囀るやうは、

天氣良げれど、世の中良げれど

言で囀る鳥は、あえつも憎い小鳥だ。

一さし刺しませう。

座元

さしたさした、ミサエダ。

鳥さし

若鳥さしたミサエダ。

長の道中で黐を切らし、腰の胴亂から黐を取り出だし、ニチャラクチャラ嚙んで、嚙んだるを黐末さにで、つけ末さの黐を本さにこえで、こえだり〳〵こえだりヨ。

座元

とでも刺すなら、三日もさしませう。

鳥さし

三日の日は又、日は又三日。

ミガサ峠をさして廻れば、蜜柑の枝に小鳥一羽、囀るやうは

向う通るボン様の

衣切れで破れだ。

肩とつて裾へ、裾とつて肩へ

つぎませう、オマせう。

言で囀る鳥は、あえつも憎い小鳥だ。一さし刺しませう。

座元

さしたさしたミサエダ。

鳥さし

若鳥さしたミサエダ。

座元

とでも刺すなら、四日もさしませう。

鳥さし

四日の日は又、日は又四日。

四つヨシワラ分げ分げ通れば、あつちの隅でもガッサガサ、こつちの隅でもガッサガサ。ガッサリ〳〵ガッサリヨ。

あれは鳥ではあるまえな。けだもんであらうが。

貂か貉で狐か鼬。此れでなるまえ、笠伏せでやりませう。

押へだ押へだ。皆が默れ、大人も默れ、子供も默れ。

赤い羽根臭れべえが、クラエ羽根くれべえが。

あつちが、こつちが。あがめんのめえ。

（天狗とヤッコが現はれる）

天狗

拙者キンジェの山に居で、鳥を狩り出だす者は何者だ。シェメエ名乗れ。

ヤッコ

あちらの腕には千力だ。こちらの腕にも千力だ。合はして二千力。

（ヤッコは手で馬を組み、天狗を乗せて下る）

（以上、佐藤ヤオ女）

ことわざ

○家（うち）の前の肥塚

自分の家でばかり強くて、他所では弱い子供などを嘲ふことば。

○羽黒町はづす

故郷を去つて遠い旅に出てブラ〳〵すること。非難や輕蔑の意が一寸含まれて居るやうである。羽黒町は村上町の南端。

○節句（つく）働ぎ

常には怠けて居て、祝日や休の日に働くこと。

○人の財布で鰐口叩ぐ

他人のふんどしで角力取る。

○宿ミシ木ぞん

何かの宿を貸すと、其の家では飯と薪とを損する。

○胡桃（くるび）二つ

兩者のよく似て居ること。

○土筆（つくし）だち

立錐の餘地がないこと。

○オフメコ見でぁだ

物事を行ふに、あれこれと文句を言ふ者（主として子供）を嘲ふ語。オフメコは昔話に出て來る女の子。

○切りメメズ見でぁだ

ピク〳〵と騒ぐ子供の形容。

○板に手

板ばさみになること。

○鰯煮だ鍋

いぐら遠い關係はなつても、血すぢは爭はれず似た所がある。

○盜人（のすと）の宿貸しても、守子の宿貸すな

子守が家の中に集るのを嫌ふ事。

○ヨメの涙

甚だ少しの物を言ふ。ヨメは嫁か又は夢の訛音か？

○ガラてば田螺（つぶ）汁

物事を推察するに機敏なこと。

○ハッカのス

其の土地に精通して居ること。

○座頭のションベン桶
まぐれ當りで、甘く當てること。

○有つ時の米のミシ
一錢を笑ふ者は一錢に泣くの意。

○やへねばタラの木
溺れる者は藁をもつかむの意。「やへね」は「困窮する」の意。タラの木にはトゲがある。

○秋中の鎌
多忙の時に怪我をすること。

○かはをそに鹽
人に買物や、用事を頼んだのに、その人が忘れたのを嘲ふ。

○貂てば兎
輕卒に飛び廻る人を嘲笑ふ語。

○水口のオゴジ
大人が他所へ行くやうな樣子を、子供が早くも悟つてチヤンと戸口で待つて居て、ついて行くこと。オゴジは田んぼに居る虫で、刺すと痛い。オゴジは人間が田に入ると刺す、さうして今に死んで流れて來ると言つて、シリミナグチで待つて居るさうである。

○タラコギ貉
僞つて苦しい眞似などをする人。（主に子供）

○七つ子のふつた糞、犬でも食はね
子供が七才になると、一番キカンボになり、いたづらをし、言ふことをきかない。

○ナガジマのヨリエア
暗闇で人が話し合つて居ること。ナガジマは三面村上中島。
同部落の板垣家は、昔から大庄屋をした。それで部落民はヨリエアがあつても、遠慮して、灯が消えて暗くならなければ、物を言はなかつたから、此のこ、とわざが出たのだと言ふ。

○オサドの見物
高みの見物の意。

○ゴンタエジログ
糞も味噌も、ごちゃまぜ。

○蛇に蠅
餘り少量で腹ごたへのしないこと。

なず（謎）

○親は竹々、子はれんげ、花は咲げども實が成らねなーず（答、茗荷）

○エガ屋の隣の、皮屋の隣の、シブ屋の隣の、中のカリコリなーず。（答、栗）

○金原越えで、竹原越えで、又その先の火事なーず。（答

煙管）

○あさげ早う起きて、あにゃとおじゃ喧嘩しるのなーず。（答、火箸）

〔註〕あにゃ＝兄。おじゃ＝弟。

○あさげ早う起きて、ズブ潜りするのなーず。（答、柄杓）

○あさげ早う起きて、地獄行つて來るのなーず。（答、つるべ）

○あさげ早う起きて、家のぐるり鐘叩いで廻るのなーず（答、あまだれ）

○あさげ早う起きて、家のぐるり牛蒡下るのなーず。（答、氷柱）

○てんちよからがさ、下ダンベフングリフングリなーず（答、里芋）

○坊主十人して長木擔いでるのなーず。（答、串柿）

○赤え小袋に粟一升なーず。（答、ほうづき）

○拜めば拜む程、長うなるのなーず。（答、縄）

○はらこの木登りなーず。（答、ぐみ）

〔註〕はらこ＝鮭の卵

尙、掛けられた「なず」が分らない時は、「あげで聞ぎませう」と云つて聞く。

第五部

方　言

凡例

一　略語表

（名）　名詞。

（代名）　代名詞。

（動）　動詞。四、上一、下一は夫々、四段、上一段、下一段の活用。

（助動）　助動詞。

（形）　形容詞。

（助）　助詞。

（接）　接續詞。

（接頭）　接頭語。
（接尾）　接尾語。
（感）　感動詞。
（句）　「ツズギソーロ」（補遺二にあり）の如きもの。又、「アラバタ」等は形容詞の性質を持つが、活用しないので「句」にする。

其の他、品詞の決し難いものは記入せず。

二　發音

イ「アペァ」の如く「ァ」としてあるものは、符號で表はせば〔apea〕、卽ち〔ea〕に近いものであらう。

其の他「エザレァ」〔ezareə〕等、以下此れにならふ。

ロ「アッツケル」の如く「ッ」は輕い鼻音。但し、ガ行の鼻音は特記しない。

又、他の濁音（例へば「ジンドーシャ」——自動車——の如き場合）も、個人差もあるので特記しない。しかし濁音の前の輕い鼻音は多いのである。

ハ「ジ」、「ズ」と書いてあるのは「ヂ」、「ヅ」も含まれて居るであらうが、凡てジ、ズに統一す。但し「デダヂ」の如きは、「デダヅ」（ダ行）と言ふ動詞から出て居るので「ヂ」とする。

又、「ヘヂ」の如きは、村上町あたりで「ヘチ」と言つて居るので「ヂ」とする。此れは村上町を岩船郡の文化中心地と見なすためである。

又、「ヤマモヂ」などは明かに「山餅」であらう故に「ヂ」とする。

ア

アエ（名）　鮎があつて、鮎を引つかけると云ふ。
アエクサ（名）　わきが。
アオシシ（名）　かもしか。
アオノロシ（名）　青大將。
アエガゲ（名）　鰍に似て居るが、其れより大きい。鰓蓋の端に刺
アガリコ（名）

一　上簇する蠶。

二　炭燒が炭材にする木を伐る時、大木に登つて枝を伐り下す者。

アギヤジ(名)

北海道やカムチャツカの方面から來る鹽鮭。地鮭に鹽をしたのはシオビギと云ふ。

アグ(名)

灰。

アグシ(名)

あぐら。

アクト(名)

踵。

アケツバ(名)

ごみ捨て場。

アゲダマ(名)

仰のけ。

アサゲ(名)

朝。

アチコチ(名)

あべこべ。

アツケル(動・下一)

思ひ出す。考へつく。

アツケル(動・下一)

一　與へる。(主として子供に)

二　預ける。

アトサマ(名)

和尚樣。(主として年配の女や、子供の語)

アナレ(名)

霰。

アニャ(名)

一　兄。

二　若い夫。(其の妻が、かく呼ぶ)

アネ(名)

一　姉。

二　嫁。

アネサ(名)

一　アネの敬稱。

二　屁ひり虫。ジョローモシ參照。

アバチェ(形)

水滴などが首すぢに落ちたやうな氣持を表はす語

アベ(動)

活用形不完全

用例

一　さあ、アベ(さあ行かう。同意を促し、又は命令的に)

二　さあ、アボ(さあ歩け、行け。命令的に)

三　一緒にアェンで呉れ(一諸に行つて呉れ)

アベア(名)

さよなら。アテァとも言ふ。(小兒語)

アボ(名)

水。(小兒子)

アマベ(名)

強い火に當つたりすると脛などに現はれる斑紋。

アメアタマ(名)

はげ頭。

アラシ(名)

東北の方(山手)から吹いて來る涼しい風。主として朝晩に吹く。

アラバタ(句)

「あんなに大きな」の意。同様に。コラバタ（此んなに大きな）、ドラバタ（どんなに大きな）等。形容詞的に用ひ、體言が續く。

アラフト（名・副）
「あんなに澤山」の意。同様に、コラフト（此んなに澤山）、ドラフト（どんなに澤山）等。

アラワ（名）
平野部の、町に近い村。ヤメァリ參照。

アン（代名）
「……の物」の意。
用例
其れ、俺アンだ。
又、代名詞でなく、
行ぐアンか。（行くのか？）等とも用ふ。

アンジョ（名）
人（主として女）に對する罵語。

アンジョサマ（名）
門つけに來る尼。

アンチャ（名）
上流の家の長男（但し子供の時）の敬稱。大人に成ったのにはアニャサ。

イ

無し。意識的ニ發音スル以外ニハ、母音「イ」ハ使ハレヌ。

ウ

ウノメ（名）
目だか。

ウロケル（動・下一）
ふやける。

エ

エ（名）
手間の交換。エ借ル、エ貸ス、エシル等と用ふ。

エオ（名）
鮭。雄をカナ、雌をメナ、初物をハヅナと言ふ。

エガル（動・四）
威ばる。

エギババ（名）
冬の峠を越す頃から現はれて、飛んだり、雪の上を這つたりする虫。

エギレル（動・下一）
天候がムシ〳〵する。

エゴ（名）
田の細い用水路。

エサバヤ（名）
魚屋。

エザレア（名）
用水路の淺渫。

エシ（助）
文の終に付けて、丁寧さを添る。但し、疑問の助詞「や」「か」には其の前になる。
用例
一　あした行ぐエシ。（明日行きます）
二　此れエシか。（此れでございますか？）

エシナ（名）

石。

エジリ（接頭）
限度にギリ〳〵接近してゐることを表はす。エジリ一荷、エジリ一杯など。

エダマシ（形）
惜しい。

エッツァセナシニ（副）
急に。突然。

エッテァ（副）
決して。下に否定の語を伴ふ。

エドヤ（名）
井戸。

エナ（名）
犬。

エネゴネ（名）
股の附け根などに出るグリグリ。

エベサマ（名）
えびす様。

エボエボ（名・副）
怒りつぽい人を譬へる語。

エボパチ（名）
かまきり。オゴリパチとも言ふ。

エモチ（名）
分家。

エモツラ（名）
あばたのある顔。

エラ（名）
えら草。嫩芽を汁の實にしたりする。

エリモシ（名）
稻熱病。エモジとも言ふ。

エロフ（動・四）
觸る。

エンコ（名）
糞。

オ

オーエン（名）
狼。

オケオケシ（形）
仰々しい。

オジャ（名）
一　弟。
二　叔父。

オダゲル（動・下一）
猫が發情して鳴く。

オダジル（名）
煽て。一種の隱語。

オチャオチャ（感）
い〻氣味だと言ふ時に發す。

オッケネ（形）
直ぐ無くなる。あつけない。

オットンタガチョン（名）
ぼと〻ぎす。

オッチ（名）
啞。

オデマギ（名）
つき從つて居る者。

オド（名）
次の子供が生れるまでの間隔。又、母が姙んで居

るのに、小さい子供があつてムヅカつたりするのを、オドミゴと言ふ。

オドス（動・四）
落す、下ろすの兩方に使ふ。

オドデナ（名）
一昨日。一昨々日はサギオドデナ。

オニオフ（動・四）
相應する。ふさふ。

オニミソ（名）
自家では强く他所では弱い子供。

オバ（名）
一　妹。　二　叔母。

オメコサマ（名）
鬼子母神。

オメナシ（名）
前後の考も無く物事をすること。

オモクラシ（形）
仰々しい。重々しい。

オモヤ（名）
本家。

オモヤミ（名）
不安。

オヤギネ（形）
悲しい。

オヤゴ（名）
親類。

オンケハレデ（副）
公然と。

オンチャ（名）
上流の家の次男。（子供の時）成人したのをオンサ、オンサマ等と言ふ。

カ

カ（名）
ぶと。蚊はヨガと言ふ。

ガオル（動・四）
閉口する。

カガベ（形）
まぶしい。

カガリシテ（接）
「……の癖に」

カキバナシ（名）
食事をつけないで人を雇ふこと。

カグダジシ（名）
角兵衛獅子。

カグラミ（名）
霍亂。

カゲ（名）
魚の鰓。鰓蓋はアプアプと云ふ。

ガシ（名）
凶作。饑饉。

カシェット（副）
痩せぎすで、スッキリしてゐること。

カジェフギバナ（名）
四月頃、白い花を開き、葉には切れ目が深く刻まれ、五、六寸位の草丈で自生して居る。一輪草と言ふのであらうか。

カジャル（動・四）
加はる。

ガス（名）
　塵芥（但し大きめの）
カダギワリ（形）
　ビク〳〵して居ること。
カダクビリ（名）
　傾いて居ること。
ガダゲ（名）
　食事回數の單位。ガダギとも云ふ。
カダネル（動・下一）
　肩に荷ふ。
カヽチケル（動・下一）
　こゞへる。
ガッカ（名）
　母。
カッチ（名）
　山の頂上。
カッテ
　用例
　一　茄子漬カッテ飯食ふ。（茄子漬をおかずにして飯を食べる）
　二　茄子漬にカッテ飯食ふ。（同右）
　三　何もカダねで食ふだ。（おかず無しで食べた）
　右の用例に示すやうに、動詞の如く思へるが、活用形が少いためにハッキリしない。
ガッテンシネ（形）
　物ともしない。平氣である。
ガヅボ（名）
　眞菰。
カデ（名）
　米を節約するために、飯に混ぜるもの。

カンナ（名）
　木綿絲。
カナガグ（動・四）
　結ぶ。ゆはへる。
カナカナ（名）
　ひぐらし。
カナコヘビ（名）
　とかげ。
カナハズ（名）
　きわどい事。
　用例
　一　あゝ間にあうだ（汽車に）。カナハズだつた。
　二　（繩が）もうチットで切れッ所だつたなァ。
　カナハズだつた。
カナバチ（名）
　すりばち。
カニョ（名）
　山を燒いて豆や小豆を作つたり、杉を植ゑたりする所。此に對して、普通の畠を言ふ時はジバダと言ふ。
カネタダキ（名）
　くひな。
ガバ（名）
　蒲。
カブレル（動・下一）
　徹る。
ガメル（動・下一）
　死ぬ。（卑語）ガメグルとも云ふ。
カモ（名）
　男の子の陰部。（小兒語）

カモス（動・四）
かき廻す。
カモフ（動・四）
一　いぢめる。
二　かゝり合ふ。
ガラケ（接尾）
動作の滑ることを表はす。
用例
一　（あゝ云ふ事もあつた後だし）どうも行ぎガラケしてる。
二　小豆もぎに行つたども（けれども）ダエガラ（何故か怎うも）ヨミ（熟す）ガラケして居だ。
カラスゴ（名）
舌に出る、ブツンと脹れて痛いできもの。
カワカッツァブロ（名）
川に居て、よく水中に潜る暗褐色の鳥。かいつぶりであらうか。
ガンガグ（名）
始末。世話。面倒を見ること。
用例
ワ（自分自身の）身のガンガグもへねで（出來ないで）默つてれ。
カンコバナ（名）
すみれ。
カンジョ（名）
大便をすること。ヤグバ參照。
カンジル（動・上一）
寒氣が强いこと。
カンチョ
珍しい物を持つて居て、誰に見れようか等と云ふ時に、
だァにカンチョ
と用ひる。主に子供が使ふ。
ガンブヅ（名）
シッカリして居て、肉づき等もよい顏つき。かつぷく。
用例
ガンブヅ良い子だ。

キ

ギガ（名）
雪を踏み固めてツル〳〵にした所。
キザワシ（名）
甘柿。
キダ（助動）
「……らしい」の意。ギダとなる場合もある。
用例
一　あした行ぐギダ。（明日行くらしい）
二　そんでねギダ。（さうでないらしい）
キコッニ（副）
充分に。
キドゴネ（名）
うたゝ寢。
ギム（動・四）
物の良いのを選ぶ。吟味する。
キメル（動・下一）
すねて、物も言はないでゐるやうな態度をする。
キヤワリ（形）
居ても立つても居られないやうな氣持がすること

キョネナ（名）
去年。
キンカ（名）
つんぼ。
キンキンタナゴ（名）
光澤の美しいたなご。
キンニャ（名）
昨日。

ク

クエ（名）
ありまき。（蚜虫）
クサシ（名）
不精。不精者。
クサリツケル（動・下一）
けなす。
クサレエギ（名）
霧。
クサレル（動・下一）
「腐れる」の他に、着物などが（ビショビショに濡れる）の意。
グシ（名）
棟。
クスナガル（動・四）
もつれる。
クタマ（名）
苦。苦の種。
クドグ（動・四）
愚痴を言ひ歎く。
クネ（名）
垣根。
クボ（名）
蜘蛛。「クボノヤジ」は蜘蛛の巣。
クマノシシ（名）
熊。
クマンデル（動・下一）
年よりも老けて居る。
クム（動・四）
交換する。何も歩を打たない交換は、ムッグミと云ふ。
グラ（名）
物の回數をかぞへる單位。フトグラ、フタグラ等と云ふ。
クラスマ（名）
暗闇。クラサマとも云ふ。
クラツケル（動・下一）
なぐる。
クロビ（名）
胡桃。クルビとも云ふ。
クワシキビ（名）
たうもろこし。
クワデル（動・下一）
閉める。塞ぐ。クェルとも言ふ。
グワンメネ（形）
向ふ見ずな。わきまへの無い。
グンズ（名）
一　魚の一種。鰍に似て居て口が大きい。ダボハゼと言ふのであらうか。
二　人を悪罵する語。

おたまじやくし。

ケァチァマ（名）

裏返しのこと。

ゲァッチョ（接尾）

ハシリゲァッチョ（走りくら）、ニラミゲァッチョ（睨みくら）

ケァル（動・四）

ころぶ。

ゲァロバ（名）

おほばこ（車前）

ケシネビツ（名）

日常の飯米を入れて置く箱。その中の米はケシネゴメ。

ケヂ（名）

凶兆。

ケ

ゲァ（名）

強い事。

用例

あの子はゲァだ。

ケァゴ（名）

杉材の大きく長いもの。船材にするから「海具」の訛だと云ふ。

ケァショオヂル（動・上一）

強くドシンと落ちる。

ゲァツチ（名）

蛙。

ゲァツチダダ（名）

ゲツ（名）

びり、最下等。ゲツボとも言ふ。

ケッケラグネ（形）

効果がない。影響がない。

ケツゴロ（名）

鳥の子の、まだ羽根の生えない小さゝもの。

ゲッタ（名）

猫の嘔吐。

ケドギ（名）

雞頭花。

ケナリ（形）

羨ましい。

ケラツヅキ（名）

啄木鳥。

ゲンメズ（名）

効果の著しいこと。てきめん。

コ

コ（名）

おはじき等を數へる單位。二つを一コと云ふ。

コウェ（形）

疲勞を表はす語。つらい、苦しい。

コグ（接尾）

名詞に接續して、其れを動詞化する。

用例

一　テンポコグ（嘘をつく）

二　セァゴコグ（ひどい目に合ふ）

三　テンポコギ（嘘つき）

四　ヨバレコギ（夜ばひをする者）

コグログ（名）
氣まゝな事。

コゴメ（名）
羊齒類の一種。食用になる。

ゴシャヤグ（動・四）
腹を立てる。

コス（動・四）
一　財産を失ふ。
二　額面の大きい金を小さくする。

コス（名）
痰

コッパオゴシ
片はしから一人殘らず藝をすること。

コッペ（名）
生意氣なる事。又は其の者。

ゴデゴデモシ（名）
かぶと虫の幼虫。

コビリ（名）
食事と食事との間の簡單な食事。

コフ（動・四）
買ふ。

コヘンコ（名）
鳳仙花。

コモズ（名）
藁の柔い所。藁屑。

コヤゲ（名）
下層階級。コメアドリとも言ふ。

ゴンニン（名）
人を悪罵する語。

サ

サガニ（接）
「……の故に」の意。「サデ」とも云ふ。「サニ」と略すこともある。
用例
今度は良うしたサガニ（サデ）、大丈夫だ。

サギダマカグ（動・四）
一足先に物事をする。機先を制す。

ザゲァシテ（接）
「……の辯に」の意。
用例
知らねザゲァシテ、默つてれ。

サケナ（名）
さつき。先刻。

ササ（名）
醬油や味噌等に生ずる黴。動詞にするには「ササタヅ」。

サズグ（動・四）
ヂットする。たゝづむ。人が耳をすましたり、魚が水底に靜止したりする事に使ふ。

サヅギ（名）
田植。

サドマメ（名）
莢蹄豆。

サバグ（動・四）
裂く。破る。

サビ（形）
寒い。

サベチョ（名）
おしやべり。

シ

ジアガズ（副）
絶えず。
シアマス（動・四）
もてあます。
シガ（名）
薄い氷。
シコ（名）
身なり。様子。
ジゴネル（動・下一）
つむじを曲げる。駄々をこねて、すねる。
ジグロム（動・四）
進退兩難で惱む。但し、未然、連體、命令の形は餘り使はれぬ。
「ジグロンでる」の如く、連用形を音便にして用ひるのが普通。
ジジクヤ（名）
喧しくしゃべること。
シタグリ（名）
客が歸らうとする時に呑む酒。
シチジョゴニヂ（名）
便所に居る、蜂に似た虫。此れが出て七十五日たつと雪が降ると言はれる。
シチャラチャネ（形）
順序などの目茶苦茶なこと。混亂して居ること。
シト（名）
糯を蒸す時に、時々上から注ぐ水。此を注ぐことを「シトウヅ」と云ふ。
シトネル（名）
粉に水を入つて、こねる。
シネ（形）
肉などの、固くて嚙み切れないこと。「シナラケ」とも云ふ。
シバレル（動・下一）
寒氣が強くある。
シマ（名）
布部部落を構成する單位で、七つある。「村の概要」參照。
シミシ（名）
褌裸。
シミル（動・上一）
凍る。
シム（動・四）
死ぬ。
ジメンコギ（名）
親類や世間との交際。單にジメンとも云ふ。
シャガダマル（動・四）
しゃがむ。「ダマル」の附く類語に次の如きものがある。
一　コゴダマル（屈む）
二　スグダマル（すくむ）
シャギアシ（名）
竹馬。
シャギブ（動・四）
金切り聲を出す。叫ぶ。
ジャデア（名）

龍。じゃ。

シャナル（動・四）

大聲を出す。叫ぶ。

シヤミ（名）

怠けること。怠け者。「シラミ」と云ふ者もあるやうである。

シャル（動・下）

のく（退く）

ジョゲル（動・下一）

一　遊戯や仕事をして居る者が、ふざけて、其れをぶちこわしにする。

二　雪や氷が溶ける。此の意味では「ゾゲル」とも云ふ。

ショシ（名）

恥しがること。氣の毒がること。

ショシケ（形）

のぎ（芒）などにチク〳〵さゝれる氣持を表はす。

ショッタレ（名）

不精。だらしないこと。又その人。

ジョーデァ（副）

常に。しじゅう。「ジョブテァ」とも云ふ。

ショーベァニ（副）

たび〳〵。

ショミジョミシ（形）

ひどい。著しい。

用例

ショミジョミシできもん（腫物）だ。

ジョーヤ（副）

多分、きつと。「ジョーシギ」とも云ふ。

ジョロモシ（名）

屁ひり虫。此の虫を「アネサ」とも云ふのは、女郎虫と云ふと怒つて一層臭くするのでアネサと敬ふのださうである。しかし女郎虫の意味はよく分らない。

シラシラ（接頭）

「大約」、「おほよそ」の意を表はし、「シラ」とも云ふ。

用例

一　シラシラ半日（約半日。うすら半日）

二　シラねっちょ（うすら一年中）

シラシラ（名・副）

甚だ熱いこと。

シロサマ（名）

獸。廢語になりつゝある。

シンゲァ（名）

へそくり。

ジンダラ（名）

亂雜なこと。ちらかされて居ること。

ス

スカス（名）

酸模。此れに似て居て、葉の大きなのは「ンマスカス」と云つて、食べない。

ズゴヘ（名）

圖々しいこと。圖太いこと。

スズ（名）

種籾。

スソトッテカタツゲ（名）

こほろぎ。

スナゴグ(動・四)
　しごく。
スネグル(動・四)
　拗る。
スノ(名)
　其のものゝ期節。しゅん。
　奥三面部落で「スノヤマ」と云へば、寒の間に行ふ羚羊狩のこと。
スビ(名)
　方法。術。
スワリヤメア(名)
　姙娠中の體の變調。
スンコ(名)
　杉の小さなもの。杉苗。

セ

「セ」ハ「シェ」、「ヘ」ト發音サレルコトガ多イ。芹(ヘリ)、一錢(エッシェン)等。
ゼア(名)
　表面に張る氷。
セアゴ(名)
　ひどい目に合ふこと「セアゴコグ」と動詞にする

ソ

ソドメ(名)
　田植女。
ソーデ(副)
　決して。下に否定の語が續く。
ソッペネ(形)
　そっけない。愛想がない。
ソベル(動・下一)
　甘へる。そばへる。甘へ、そばへる子供を「ソベカジ」、「カジドン」などゝ言ふ。
ソンマ(副)
　直ぐに。

タ

ダア(代名)
　誰。
ダア(副)
　いや。いや遠ふ。
タガグ(動・四)
　持つ。
タガラ(名)
　魚などを料理した後の骨。
タギル(動・四)
　油を熱する。
ダグラ(接尾)
　「……を無駄にするばかりだ」の意を表はす。
　用例
　紙ダグラだ。習字も止めれ。
タグツグ(動・四)
　しがみつく。まつはりつく。
タゲル(動・下一)
　叱る。
ダシ(名)

東の方から吹く、なま温い風、しかし飯豊山の方から吹く、エーデダシは冷い。

ダダ(名)
子守子。

ダダゲル(動・下一)
駄々をこねる。

タヂメァ(名)
棟上の祝。

ダッペ(名)
一　田や泥のある小川などに居る一種の小魚。鮠のやうにヌル〳〵して居るが、形はナマヅに似て居る。
二　男のもの。

ダデヤ(感)
あゝ。やれ〳〵。驚き、悲しみ、嫌悪などを表はす語。主として女が使ふ。

タナボ(名)
田んぼ。

タニ(名)
だに(蟄蟲)

ダマダ(副)
勿論。勿論さうだ。

ダラ(名)
下肥。

タラコグ(動・四)
僞つて苦しいやうな振りをする。「タラ」は其の名詞。

ダルマ(名)
マント。

ダルマソー(名)
雛菊。

タンケァ(名)
田などに居る黒い殼の二枚貝。烏貝か。「ババタンケァ」とも言ふが、此の時は婆のものに聯關を持たせるのであらう。

タンコロ(名)
一　種油と燈心を使ふ燈明。今は使はれなくなつた。
二　痰。
三　下駄の齒などに挾まる雪塊。

タンボ(名)
沼。

チ

チシ(名)
屋根裏の、藁などを置く所。

チジリマギ(名)
つむじ。

ヂッコ(名)
「爺」の罵語。

チャク(名)
お手玉。

チョコ(名)
猫の愛稱。

チョス(動・四)
いぢる。さわる。

チョーセンギグ(名)
えぞ菊。アスター。

チョッチョ(名)

小便。おしつこ。（小兒語）

チンギ（名）

大きい秤。餘り使はれなくなつて居る。

チンポ（名）

男のもの。（小兒語）

ツ

ツエッタン（名）

馬追虫。「マズモシ」とも云ふ。

ツグメ（名）

土筆。

ツグラ（名）

幼兒を入れる、藁で作つた壺狀のもの。

ツタガル（動・四）

ぶらさがる。

ツブ（名）

田にし。

ツブコ（名）

雨具を持たないで、雨や雪に濡れること。

ツボゴフ（動・四）

キチンと正座する。

ヅンダコ（名）

子供の腹あて。

テ

テ

擬聲、擬態の語に續き、其れを形容詞のやうにする。

用例

一　あの清水は、さんきんテがつた。（あの清水は甚だ冷たかつた）

二　きんきんテ手足。（甚だ冷い手あし）

三　此れはきんきんテ。（此れは甚だ冷い）語については、「デ」となることもある。

用例

やりやりデ。（甚だ暑い）

デァズリ（副）

全然。まるで。一向。下に否定の語が續く。

テァド（名）

方向。

テァラネル（動・下一）

あぐらをかく。坐を崩す。

テゴ（名）

手つだひ。又、其の人。

デダヂ（名）

仕事着。デダヅは仕事着を着る。

テッコ（名）

いたづら。悪戯のはげしいこと。

テッコメロリ（名）

おてんば。

デド（名）

一　奥山に對して、端山。

二　外の方。

テン（名）

ところてん。

テンツギバナ（名）

かはらなでしこ。

テンポ（名）

嘘。「テンポコグ」は「嘘をつく」。「テンポコギ」は「嘘つき」。

ト

トカサ（名）
　雞冠。
トガダ（名）
　戸外。外。
トキトキ（名）
　あわてること。あわて者。「トキ」とも云ふ。
トクサ（名）
　羊齒類の一種。但し所謂、木賊ではない。便所の尻拭きに用ひる。
トショリボセ（形）
　老けて居る。
トッツァ（名）
　夫。亭主。
トツグ（動・四）
　蛇、猫などが祟る。
ドッパ（名）
　鬼ごつこ、其の他の遊戯中に、「ドッパ」と言へば鬼は其の者を捕へることが出來ぬ。ドッパを宣告することを「ドッパカゲル」と云ふ。
トッパツケァ（名）
　故意にしたのでないこと。
トヒクフ（動・四）
　面くらふ。泡を食ふ。
ドンビコ（名）
　魚の心臓。
ドングリ（名）
　いたどり。
ドンゲサレ（動）
　寢ろ。（鳥語）命令形だけしか使はぬので、活用形不明。
トンコ（名）
　熟柿。
ドンベル（動）
　泣く。（卑語）活用の場合が少くて、其の形を決め難いが、下一段に屬するのでなからうか。
　用例
　何そんのにドンベてれバ。（何をそんなにメッ〳〵泣いて居るのか）
ドンボ（名）
　蜻蛉。
ドンボクサ（名）
　つゆ草。

ナ

ナガマル（動・四）
　横になる。寢そべる。
ナゲル（動・下一）
　捨てる。
ナジ（名）
　分泌液。
ナヅギ（名）
　ひたい（額）。フテァグチとも云ふ。
ナデ（名）
　雪崩。

ナメラ（名）
なめくぢ。「ナメラクヂ」とも云ふ。
ナレル（動・下一）
魚などが古くなる。
ナワダ（名）
鮭の腸。
ナンジョシヤ（感）
おやまあ。何と云ふことだ。何如にすべきか。主として女が使ふ。
ナントモ
有難う。

ニ

ニドエモ（名）
馬鈴薯。
ニメル（動・下一）
雪が溶けかゝつて、シットリする。
ニヤジ（名）
躊躇すること。どつちとも決めることが出來ないこと。
ニワ（名）
屋内の一部。土間になつて居て、稻こきをしたり其の他の作業場となる。

ヌ

ノと訛られる。ノスト（盜人）、ノリ（ぬるい）等。

ネ

ネァネァサマ（名）
神様。佛様。（小兒語）
ネンクセ（形）
饒えて居る。
ネソケル（動・下一）
寢そびれる。
ネズホル（動・四）
根掘り葉掘り尋ねる。
ネヅ（形）
一　丁寧である。
二　儉約である。
ネッコ（名）
一　木の切株。
二　强情。「ネッコオス」は强情張る。
ネッチョフケ（形）
しつこい。執念深い。
ネブスケ（名）
朝寢坊。「ネブスケコギ」とも言ふ。
ネブリコ（名）
ねむの木。
ネマル（動・四）
坐す。
ネラ（名）
お前たち。「ンナ」の復數。
ネンベ（形）
じやんけんをする時に、猾いことをすること。

ノ

ノエゴ（名）

稈心（藁の心）。「ノエゴスブ」とも言ふ。

ノクタマル（動・四）
　暖まる。

ノゴフ（動・四）
　拭ふ。

ノスブ（動・四）
　結ぶ。

ノバ（名）
　猿股をはかぬこと。

ノビルコ（名）
　野蒜。

ノベル（動・下一）
　差し出す。

ノメシコギ（名）
　怠け者。

ハ

バ（助）
　疑問の助詞。
　用例
　だつたバ。（誰だ？）

バエ（名）
　柿や栗などを落すために投げつける、手頃の棒。

ハエナ（名、副）
　先だつて。

ハガジ（名）
　仕事（主に田畑の）の手廣さ。
　用例
　あこはハガジはつてる。（あの家は田畑を澤山耕作して居る）

バガテァロ（名）
　馬鹿奴。

ハギゴ（名）
　びく（魚籠）

ハギル（動・四）
　子供等が仲間外れにする。

ハグ（名）
　端數。物を組み合せる時のはした。

バグニアワネ（形）
　似合はぬ。釣合はぬ。

ハシタネ（形）
　氣が良く廻る。抜目ない。

ハッケ（形）
　冷い。

バッコ（名）
　「婆」の罵語。

ハッタギ（名）
　ばつた（飛蝗）

バッチ（名）
　末子。

ハデ（形）
　敏捷であること。

ハデ（感）
　「然り」「さうである」の意味を突慳貪に答へる時に用ふ。主に女が使ひ、廢語になりつゝある。

ハド（名）
　一　鳩。
　二　ばつた。

ハナル（動・四）

始まる。「ハネル」は其の他動詞。

ハバゲル（動・下一）
塞ぐ。「ハバガル」は其の自動詞。

ハマシャグ（名）
蟻地獄。

ハミオベル（動・下一）
味をしめる。

ハヤス（動・四）
切る（主に食物などを）

ハラス（名）
魚の腹の部分。

ハラタダギモジナ（名）
狸。

ハルキ（名）
春さき。早春。

ハンギリ（名）
盥。

バンゾ（名）
賣手と買手、又は交換者の中に入つて、いろ〳〵と取りなして歩みよらせる者。

バンチョ（名）
拍子木。

バンドリ（名）
むさゝび。

ハンバギノギ（名）
旅から歸つて來た祝の酒盛。

ヒ

ヒク（名）
身なり等に氣を配ること。生意氣なこと。又は其の人。

ヒクナギ（名）
せきれい。

ヒスワグ（動・四）
桶などが干つた爲に、板の間に隙があく。

ヒダリチョッケァ（名）
左利き。

ビャチゴ（名）
ぶらんこ。

ビッタ（名）
人を罵る語。

ヒド（名）
凹地。

ヒドル（動・四）
建具、板などが、干つた爲に形が歪む。

ヒナクセ（形）
きな臭い。

ビノジ（名）
川に居る、細長い一種の卷貝。男の子のものを「ビノジ見でァだ」など、言ふ。

ヒヤスミ（名）
午寢。

ヒロ（名）
日當。賃銀。

ビロビロ（名）
甚だ飢ゑたさま。

ヒーワリ（形）
忌中であること。

フ

フギ(名)
　吹雪。
フギドリ(名)
　一　吹雪に遭つて倒れること。
　二　燒いた餅を湯に潜して柔にし、きな粉をまぶしたもの。
フグノバンケァ(名)
　蕗のとう。單に「バンケァ」とも云ふ。
フグラガスンノ(名)
　ゴム風船。「カッ　ベァ」とも云ふ。
フタグジ(名)
　薪を小出しにして置く所。大きな箱を置くか、又は四所になつて居る。
フンググル(動・四)
　蹴る。
フノメァ(名)
　午前。
ブフ(動・四)
　おんぶする。負ふ。但し未然形「ブハ」は「バ」已然形、命令形「ブヘ」は「ベ」と發音する。
ブマ(名)
　手ぎわの悪いこと。さまがかなはないこと。
フマカラ(名)
　午後。

ヘ

ベァギ(名)
　割木。
ベァル(動・四)
　おんぶされる。負はれる。
ヘァト(名)
　物を貰つた時に言ふ、お禮の言葉。(小兒語)
ベゴ(名)
　牛。年配の者が此の意味を知つて居る位で、廢語になつて居るやうである。
ヘゴコフ(動・四)
　煽動する。おだてる。そゝのかす。「ヘゴカゲル」とも言ふ。
ヘヂ(名)
　嫁(又は聟)が、自分の配偶者と一緒に實家に行くこと。其の日は決つて居る。(婚姻の部參照)
ベッチョ(名)
　一　女のもの。
　二　性交。
ヘヅル(動・四)
　絶壁になつて居る所の縁や川の岸などを漸く通ること。其の所を「ヘヅリ」と言ふ。
ヘナ(名)
　流しから流れ出る水を溜めて置く所。
ヘナドリ(名)
　かはせみ。
ベヤ(名)
　着物。
ヘル(名)
　蛭。ヘルマメとも云ふ。
ヘロヘロ(名)

甚だ空腹なさま。

ベン（名）
繪の具。

ヘンチェン（名）
便所。

ヘンチェンモシ（名）
蚯。

ベンバナ（名）
松葉牡丹。

ヘンバン（名）
十能。

ホ

ホエド（名）
乞食。

ホゲル（動・下一）
掘り擴げる。搔き擴げる。

ホゲツケル（動・下一）
急に投げ出す。

ホシカゲル（動・下一）
ケシかける。尙、ケシかける時には、犬に向つて「ホシ、ホシ」と言ふ。

ホソビ（名）
口笛。

ホダ（名）
雪の深い所。ホダワラとも云ふ。

ボチ（名）
薪にする、杉の枯れた小枝。

ホチョ（名）
ほたる。

ボッコス（動・四）
毀す。

ホッツァレル（動・下一）
色が悪くなる。される。

ボッテズカグ（動・四）
人手が足りなくて、テンテコ舞する。

ホドナガ（名）
爐の中。

ホドラ（名）
蕨の成長したもの。

ボヤ（名）
魚。

ホログ（動・四）
打ち拂ふ。

ホロケル（動・下一）
毫碌する。ボカンとする。

ホンデネ（形）
知らない。氣がつかない。

ボンノクト（名）
頸窩。ぼんのくぼ。

ボンバナ（名）
みそはぎ。

マ

マア（名）
父。

マギ（名）
血すぢ。尙、此の外、「親戚」の意味を表はす語

として、「オヤゴ」、「エッケ」があり、兩者は同じ意味に用ひられる。

マグル（動・四）

「卷きあげる」の他に、「ころがす」の意に用ふ

マジラ（接尾）

「それと共に」、「其れぐるみ」の意。

用例

一　容れ物マジラ呉れる。

二　皮マジラ食ふ。

マスビギ（名）

蝦蟇。

マヅ（形）

きたならしい。

マブ（名）

懸崖。絶壁。

マブラガス（動・四）

美しがらせる。子供が珍しい物を持つて居たりまると、「マブラシャエ、マブラシャエ」などゝ言つて美しがらせる。

マミケ（名）

眉。「マミヤア」とも言ふ。

マキヂ（名）

何も混ぢらぬ餅。

マラケル（動・下一）

束ねる。

マンジョ（名）

一　女のもの。

二　性交。

マンバジ（名）

正確でないこと。

用例

マナゴ（眼）マンバジになつて、讀み間違した。

ミ

ミギリ（名）

右。

ミシ（名）

飯。（朝ミシ、フルミシ、ヨミシ等と用ふ）

ミズ（名）

陰濕地に生える、莖の淡紅、又は淡綠色で、多汁ねばり氣のある草。うはばみ草か。汁の實にしたり、叩きつぶして味噌を混ぜたものを「ミズモミ」此に水を加へたのを「ミズドロロ」と言ひ、夏の食物。

ミヅズ（名）

雜炊。

ミッケ（名）

約束を確定させる時に言ふ語。（小兒語）「ミッケ」又は「ミッケ、針ミズ百本クグレ」などゝ言ふ。かう言ふ事を「ミッケカゲル」と言ひ、ミッケ掛けられると、違約出來ない。

ム

「ム」は「モ」と訛られることが多い。虫――モシ等。

ムズゲ（形）

甘味が強い。

ムセ（形）
無くなり難い。消費され難い。「オッケネ」の反對語。

ムドギ（名）
最盛期。しゅん。

メ

メァソ（名）
おべっか。「メァソコグ」は其の動詞。

メゝクセ（形）
見にくい。體裁が悪い。

メゴ（名）
可愛がつて居る子。

メジェ（形）
可愛い。

メジャガル（動・四）
可愛がる。

メッコ（名）
片目。

モ

モエル（動・下一）
經過する。

モエル（動・下一）
孵化する。

モガヂェ（名）
百足。

モゲル（動・下一）
死ぬ。

モゴツケネ（形）
可愛さうだ。

モサ（助）
文の終に添へて、念を押す。

用例
そんでね（さうでない）モサ。

モジグル（動・四）
皺くちゃにする。「モジクタマニスル」とも云ふ

モヂクサ（名）
蓬。

モナモ（助）
「……さへも」「……迄も」。

モンカ（名）
化物。

モンソ（名）
うわ言。其の他、幻覺。

モンダ
大きい。多い。年よりの人が使ふ。たとへば、物を分ける時に、「ンナ（お前の）方モンダ」

ヤ

ヤガム（動・四）
そねむ。

ヤクサラ（副）
わざわざ。「ヤグヤグ」、「ヤチヤチ」も同じ意味である。

ヤグド（副）
故意に。わざと。

ヤグバ（名）
便所（隠語）。排泄することを「カンジョ」と云ふので、此れに「勘定」の意味を掛け、勘定から納税を聯想し、其れから「役場」になつたのだと云ふ。

ヤッチモネ（形）
餘計な世話をすること。おせっかひな事。

ヤット（副）
多く。澤山。（年よりが使ふ）
用例
えゝ、ヤットだどど。（これはマア澤山あること）

ヤットデ（副）
漸く。

ヤッペ（名）
野郎。小僧っ子。（輕蔑、愛稱の意味で）

ヤバッシ（形）
むさくるしい。不潔な。

ヤヘネ（形）
せつない。たまらない。

ヤマドリ（名）
大きな螢。

ヤマモチ（名）
粳の飯をつぶしてまるめ、中に胡桃味噌などを入れたもの。奥山の木伐り等がこしらふが、家でもこしらふ。

ヤメアリ（名）
山の中の村。

ヤメル（動・下一）
痛む。

ユ

「ユ」ハ「ヨ」ト發音サレルコトガ多イ。夢（ヨメ）、お湯（オヨ）等。又、雪（ユギ）ノ如キ例モアリ。

ヨ

ヨギ（名）
斧。

ヨグリ（名）
舟二艘で網を引く漁法。鮭などを獲るときに行ふ
エグリとも言ふ。

ヨグル（動・四）
一　「ヨグリ」をする。エグルとも言ふ。
二　汁の中の實を、杓子でさがす。

ヨゴス（動・四）
濡す。

ヨシカ（接）
「……それよりもむしろ」

ヨズバリ（名）
寢小便。

ヨダラ（名）
川に流れる雪塊。

ヨノゲ（名）
夜の天氣模樣。

ヨバル（動・四）
呼ぶ。

ヨバレコギ（名）
夜這する人。夜這ひ。

ヨビカリ（名）
　宵ばり。
ヨベナ（名）
　昨夜。
ヨマニ（名）
　夜。
ヨミヅゲァリ（名）
　命拾をすること。
ヨロギ（名）
　ゐろりの縁の木枠。

ラ

ランキ（名）
　狂暴なこと。
ランゴグ（名）
　亂雜にちらかす事。

リ

リ（形）
　良い。

ル

レ

レァチ（名）
　空地。餘地。

ロ

ロ（助動）
　「だらう」、「よう」。
　用例
　一　んなも行ぐロ。（お前も行くだらう）
　二　こって止めロで。（此れで止めよう）
ログ（名）
　物の安定。すわり。
ログネル（動・下一）
　あぐらをかく。坐を崩す。

ワ

ワ（代名）
　手前。（但し自稱の意味でない
ワガバ（名）
　古雪の上に積つた若雪。
ワゲァショ（名）
　青年。
ワゲァショナガマ（名）
　青年團。昔は「ワガレンジョ」とも云つたさうである。
ワサ（名）
　いたづら。
ワサゴト（名）
　まゝごと。

オ

無シ。

エ

ヲ

發音上、「オ」ト區別セズ。

ン

ンガ（代名）
お前。（罵語）
ンダル（動・四）
捨てる。
ンナ（代名）
お前。
ンフ（副）
いゝえ。（但し「フ」は鼻からスッと出す音である）

補遺一

アゴ（名）
酒。（小兒語）
アチャ（名）
火。（小兒語）
アラガマシ（形）
荒々しい。亂暴な。
ウッツェアコグ（動・四）
ひどい目に合ふ。閉口する。ウンゼァコグとも云ふ。
エッンチコタンチコ（名）
柳の蕾。
エリモドヅギエァ（名）
血族でもなく、又婚姻關係もないが、近しく交際するやうな關係。知己との交際。
カッペァ（名）
大擧丸。
カナジョム（動・四）
子供が親を慕つたりすること。
カビ（名）
稻の收穫量。但し籾の量でなく、束數。「株」の訛であらうが、「カブ」と云ふ語は別に存在し、稻に限つて「カビ」と云ふ。
ゲスビレ（名）
臀鰭。
コッベタ（句）
「此んな小さい」の意。同樣に、アッベタ（あんな小さい）、ソッベタ（其んな小さい）、ドッベタ（どんな小さい）等。
サゲノバンゲ（名）
一昨夜。
シヤギ（名）
唾。シラギとも言ふ。
ズグナシ（名）
一　六月頃、赤色の花を開く灌木。たにうつぎであらうか。

二　性根が無くて、少し足りないやうな者を罵る語。

花は立派だし、葉はカデになる。
何が足らのでズグナシだ

と、歌にもあるさうだが、ズグナシの葉は飯の中に炊き混ぜられるものださうである。

ズブクリ（名・副）

全然。まるで。ズブログとも云ふ。

用例

ズブクリの素人だ。
ズブクリ駄目だ。

タガチョ（名）

地下足袋。

タデ（名）

程度を同じくするもの。貧富、年齢、品質の程度を同じくするものを、「あのタデの家」、「某のタデの若え衆」、「此のタデの品」などと用ふ。

タバグル（動・四）

欺し取る。横領すること。

ダン（名）

草を刈る時の單位。八ソグ（束）が一ダンである。

デホ（名）

冗談。ズホとも云ふ。

ドズアメ（名）

大雨。

ドズボゲ（名）

便所の溜桶。

ドッベ（名）

蝶。蛾。

モヨクル（動・四）

様子を見る。ためらふ。

ヤジル（動・四）

ぶさ〳〵して居る毛を、火の中にサッと通して、綺麗にする。ワラジ、アシナガ、其の他の藁工品は最後に此の工程をする。此の仕事をケヤジリと云ふ。山芋も調理する前にケヤジリしなければならぬ。

ワッパグ（名）

分擔の範圍を決めて仕事をすること。ワッパグで働く時は、自分の受け持を濟ませば、上りにしてよい。

補遺　二

カガラシ（形）

うるさい。

ギグ（名）

莖。

クギ（名）

大根の莖。

クワントーアガリ（名）

日の七つに仕事を止めること。關東の人は仕事の上りが早いから、かう云ふのだと。

ケケシ（形）

靈驗あらたかなこと。又、餌も覿面なこと。

コジリカギ（名）

語原は、木流しの最後の人のことである。轉じて會合などで最後まで殘る者を云ふ。

サガス（動・四）

使ふ。用ひる。

用例

一　あっこ（あの家）の振舞には、何サガシたヤ。（料理に）

二　あんまりデッコで（あんまり大きくて）、サガヘ（セ）ね。（道具等を）

スワ（名）

山ぶどうの蔓。簗や、ヤラエ（しがらみ）等を作る時に、材を結束するに使ふ。

タダキ（名）

蕎麥肥にするために刈る草。七月の下旬頃主としてアガワダと稱する草や、柳の新葉を刈る。

チジョ（名）

落穂米や、ニワの掃き溜めの米。此の語は今は餘り使はれないやうである。

チョーゴエ（名）

粗穀に人糞を混ぜた肥。荒操り後、田に入れる。

ツズギソーロ（句）

昔話の結びの言ひ事。

ネジ（名）

柴などを束ねる時に、生枝を拗つたもので縛る。其の拗つた生枝のこと。

ハシラグ（動・四）

乾燥する。はしゃぐ。

ハッパ（名）

通せんぼ。立ち塞ること。

ヘソビ（名）

鍋、釜の墨。

ミソベア（名）

愛想。おせじ。

ムギ（名）

一　枝澤に對して、本流になつて居る澤や川。

二　着物に於て、袖に對してミゴロの部分。

メカス（名）

米を精白する時に生ずる、胚芽や外皮や碎米等のパサ〳〵する所、又、蕎麥を挽く前に取り去る其のへたの部分。

補遺　三

アエノカェ（名）

海の方から吹く風。夏の天氣のよい日中にソロソロと吹く。

ノデワラ（名）

稻苗を束ねる藁。

ノノ（名）

麻布。

ハジャグ（名）

約束を破ること。

形容詞の活用

一　オ、オ、エ、エ、エの段に活用するもの

アバチェ、メジェ、オヤギネ、ネンベ等。

用例　アバチェ。

○ちっともアバチョね。（ね＝ない）

○あまだれ（が）アバチョで駄目だ。

○あまだれ（が）アバチェ。

○アバチェ事なあ、此のあまだれ。

○アバチェば悪りもさ。（悪るいよ）

二　オ、オ、ウ、ウ、ウの段に活用するもの

ネヅ。マヅ等。

用例　ネヅ。

○ネヅォね。

○もっとネヅォへ(……へ＝……しろ。せよ)

○あの家はネヅ。

○村で一番ネヅ家だ。

○もっとネヅば、ちっとは樂にならうが。

〔註〕「ヅォ」とは書いたものの、發音は「ゾ」と同じである。

三　オ、オ、イ、イ、イの段に活用するもの

エダマシ、ショミジョ、ジキヤワリ等。

○ちっともエダマショね。

○エダマショで仕樣ね。

○あゝエダマシ。

○エダマシ人だつた。

○エダマシば要らね。

四　ウ、ウ、イ、イ、イの段に活用するもの

ノギ、サビ等。

用例　ノギ。

○ちともノグね。

○ノグなつて來た。

○此の火燵はノギ。

○ノギ天氣だ。

○もちッとノギば行ぐとも。(行くけれ共)

〔註〕右の例はオ、オ、イ、イ、イと活用する者もあるが、此の例の如くする方が多いやうである。

五　ウ、ウ、エ、エ、エの段に活用するもの

用例　ニグゥェ(憎い)

○ちっともニグね。

○ニグで我慢出來ね。

○あゝニグゥェ。

○ニグゥェ野郎だ。

○ニグゥェば、もつと叩ぐ筈だ。

六　例外

用例　リ。

○ちっともヨね。

○もっとヨ書げ。

○そって(其れで)リ。

○リ男振りだ。

○そってリば、止める。

動詞の變格活用

一　來る。

こ、き、くる、くる、け、こえ。

二　しる。(爲る)

し、し、しる、しる、へ、へ。

音便について

買ひて＝コーデ

借りて＝カッテ

習ひて＝ナローデ

附錄

丹田照一郎・丹田二郎　協同採集

越後三面村三面部落スノヤマ聞き書

まへがき

此の報告は、我々二人が昭和十一年十二月二十二日、丹田照一郎宅に於て、〇〇部落の人、〇〇〇〇〇氏に聞いた事をまとめたものである。

尙、補足的に、同部落の〇〇〇〇氏談（同年十一月）、千繩部落の田村留一郎氏談（同年十月）――いづれも照一郎宅に於て――を入れた。

今かうして整理して文字にして見ると、多くの不備を發見するのである。

第一に我々が實地に其の狩を見たことがないこと、第二に傳承者（田村留一郎氏を除いて）が永らく狩に出たことがないことなどである。〇〇〇氏は四十年近くも出獵したことがないさうであるし、〇〇氏は未だ經驗がないらしい。

爲に、生々しい感覺も捕へ難く、互に隔靴搔痒の感を免れ得なかつた。

故に此の聞き書の中には、不備のみならず、或は思はざる誤謬すらも含まれて居るかも知れない。

我々は此の報告が讀者の先入主とならず、此れを踏み臺として、神秘の幕で覆はれて居る。ゆゝしき「神事」とも云ふべき同部落のスノヤマ行事を闡明せんとする研究家を希むものである。

さきに村上氏は同部落に約一ケ年滞在され、同部落民に民俗研究の重要さを印象づけられた。我々の採集に於ても、理解ある傳承者――傳承者として優秀であるか否かは別として、を得たことは、同氏の努力に負ふ所多々あるものと思ふ。

聞く所によると、同部落に於ける此れらの傳承も年と共に消えて行くとのことである。

村上氏によつて醸された此の機運を逃さず、氏の開拓された土地からの收穫が、一日も早く果されることを熱望するのである。

昭和十二年一月五日

丹田照一郎

凡例

1　文中の「トーナエ」、其の他の語彙に於て「ジ」、「ヂ」のいづれにすべきか不明であるがすべて「ジ」に統一す。「ズ」「ヅ」も「ズ」とす。但し、「ヤマモヂ」などは「山餅」であらう故に「ヂ」としたのである

2　「トーナエ」や忌詞はすべて發音通りに記す。また「トーナエ」の右側に付記した解釋は、傳承者の其れであつて、採集者の解釋ではない。

奥三面部落スノ山聞き書

○スノヤマ

スノ山と云ふのは、寒中に行ふ十一日間のアオシシ（羚羊）狩の事である。

〔註〕スノ山の意味はハッキリしないが、スノは三面村地方々言で、物の「シュン」「盛りの期間」と言ふ意味がある。

用例

一　今は丁度、栗のスノだ。

二　もふ？（も早や）、スノ過ぎた。

此のスノ山で使ふ言葉や、其の他いろ〳〵のホーゴト（法事？）は固く秘密になつて居て、常に部落内では口にすることが出來ず、他から聟に來た者にも教へない。

○サンナエ

狩に出る前の晩十時頃、水ゴリを取つて、常着のまゝでツボノマエと言ふ所に集る。ツボノマエは小池大炊介氏の近所である。此所で人數と、連れて行く犬の數とを數へ、役割を決め、エーホーと三度大聲を揚げる。

役割にはフジカ、ナガラ、オマタギ、ホーチョー、シノボー、コマタギがある。

イ　フジカ

フジカは親方である。フジカが火に當つて居る時は他の者はフジカに背を向けて、顏を見合はせないやうにする。又、下の者は直接にフジカと口をきくことも決して許されない。

此のやうに、フジカは威張つたものであるが、しかし皆にアヤマチ、ケガの無いやうにと氣を付けたり、雪崩が落ちさうな所ではホーゴトをして雪崩を止め、自分がまつ先になつて進む。

ロ　ナガラ

ナガラはフジカと下の者との取次をしたり、言はゞ助役格である。

ハ　オマタギ

オマタギは笠や履物の手入れ、修繕などを受けもつ。

ニ　ホーチョー

ホーチョーは炊事やシシの料理の指圖をする。

ホ　シノボ

次の「コマタギ」のかしらである。

ヘ　コマタギ

コマタギは一番下の役である。炊事や其の他さまざまの雜事をする。**イ**から**ホ**までは一人づつ、殘り全部が

へになる。

以上、大體年の順で決める。しかし始めての者は誰もコマタギになる。但し、小池太郎吉氏が加はる時は、氏より年上の者があつても、氏がフジカになる。

〔註〕　1　オマタギ、コマタギは夫々オマタ、コマタと略して言ふこともする。

2　ミノルカ

此れは○○○氏の談には無く、○○○○氏に聞いたのであり、且つスノ山の時の語でなく、熊のシシ狩の時のことである。

ミノル力は、水の中で死んで居る熊を見つけた時、唱へ事を言つて、其の熊を取る。水死の熊は取つてはならない事になつて居るが、ミノルカがかうすれば差しつかへない。

ミノルカは獨立の役名ではなくて、フジカなり、又はナガラ、オマタギの誰かが、水死の熊の許可を請ふ唱へ事を言ふ任に當る。其の人を言ふのであると。

熊狩の際にも、フジカ、ナガラ等の役名は存在するらしい。村農會の高野氏の採集にも、ミノルカと言ふ語があつた。

それから、揃つてヤマサギの處へ行く。ヤマサギとは小池太郎吉氏（家の名は太郎作）のことである。

フジカはヤマサギからノサを貰つて、家へ歸る。

此の出獵前夜の行事をサンナエと言ふ。家へ歸ると、獵に行く者は別な部屋に寢る。

〔註〕　人數についての禁忌は聞き洩らしたが、三面村千縄部落では十二人を絶對にきける。若し十二人になつた時は、一人を部落に殘して行く。そして獲物は其の殘つた者にも同じく分配する。――大字千縄、田村留一郎氏談

○翌朝、各々水ゴリを取つて、ツボノマエに集り、エーホーと三度大聲をあげ、隊を組んで氏神に詣り、それから部落の家々に暇乞に廻る。各家では、大獵であるやうにとの旨の挨拶をする。

一同は一旦家へ歸つて、食糧、其の他の荷物を持つて出發する。スノ山には鐵砲ではなく、槍を持つて行く。

狩人には一人づつの見送りの人夫がついて、山小屋まで送る。

そして、送り人夫、コマタギ、シノボ、ホーチョー、オマタギ、ナガラ、フジカの順で進むのである。

○山小屋では毎朝、皆が水ゴリを取る。フジカは其の外に日に何べんも取る。

夕食後、ナガラは明日の目的地をフジカに問ふ。

フジカモサ
（明日は）（何處を）
アスワドゴオナッカゲデ
ヨグスマエモースベ
サッピラゴッテ
スマエモース

すると、どこそこだと答へる。オーサワと言ふ所だとする。それを聞くと、シノボとコマタギが

ニシヤマニカガッタバ

ナンジャヤホホン
（日照）
ナーヒデリコンコン
（雪）（濕つた）
ユギヤニンメターリナ
サンゴリゴーリニ
ゴーリメデ
ゴーリゴーリド
ミダリヤノホホン
（地名）
オーサワニ
（アオシシ）
シシノヨーローワ
スグンダリホホン
（明日は）（親子三匹）
アスワオヤコサンビギ
ツノオドニホホン

と云ふ。此れをトーナエと言ふ。山の神に向つて唱へる。山の神は小屋の奥正面の柱（註）に祭る。

トーナエを言ふ時の姿勢は、右の膝をつき左の膝を立て、右の拳の中の拇指と人差指とを起して伸ばし、その二本の指先を額に當てるのである。此のトーナエに毎晩する。トーナエが終ると寢る。

〔註〕此の柱を布部や千縄の木伐りはダンベシラと言ひ、馬のお姿が書かれてあるコマガダと言ふものと、ブナの木の小枝を小さく束ねたもの――此れをオハヤシと云ふ――と、ニシン（頭の付いた身欠鰊）を二本、其の柱に縛り付けた。

○カデ

スノ山に出て、三日目、七日目、九日目、十一日目をカデと言ふ。（もつとも、カデは忌詞となつて、實際に口にする時は「ナッカデ」と、「ナ」を接頭するらしい）

其のカデの前晩にヤマモヂをこしらへる。ヤマモヂは粳の飯をつぶしてまるめた餅である。（註1）

出來たヤマモヂをメンツ――食器の一種――に山盛にしてフジカにすゝめる。

此の時は次のやうに言ふ。

フジカモサ
（明日は）（三日）
アシタワミッカ（又は七日、九日、十一日）ノナッカデド
ヨグスマエモースベ
（註2）
オラタニノコマダ
（祝事）
ナエワエゴドニ
（心付け）
チコゴロツケダカリキザミダエ
サッピラゴツテ

スマエモース

するとフジカは「おえ、ナガラ。（山の名）チンジャガラ（頂上）のサデッコのやうだなア。」など、言ふ。澤山あつて山盛にしたことをほめるのである。

そして其のヤマモヂは皆に食べさせるが、慾なフジカは家へ持つて歸つたりする。

カデの朝に、ノサを柴の先につけて、小屋の裏手の大木に納めて祭る。

〔註〕1 すゝめるのはホーチョーらしく、其のすゝめる唱へ事を云ふのはナガラらしいが、採集者の不注意で、確めなかつた。

2「オラタニ」は「オラタリ」の聞き違ひかも知れぬ。オラタリだとすると「俺あたり」の訛で

オラタリノコマダは「我々のコマダキが」の意味にも取られることゝなる。「ニ」か「リ」か、ハツキリしなかつた。

○必ず十一日目に歸る。此の日、部落から小屋まで迎へに行く。小屋の附近で三べん大聲をあげる。そして此の時から山の作法や忌詞の束縛を解くと言ふ事を、フジカが言ふ。

翌日、ヤマサギ（小池太郎吉氏）の家でハンバギノギをする。

次に忌詞をあげる。忌詞をヤマコトバと言ふか、カリコトバと云ふか聞き洩らしたが、布部や千縄の木伐りはヤマコトバと言つた。

「ナ」と「サ」

或る語が忌まれる時、其の語の頭に接してつける場合が多い。前記、トーナエ中にも多かつた。（ナヒデ、ナコゴロツケダ、ナッカデ、サデッコ等）

「ナ」を接頭するのは、千縄部落のヤマコトバにも多い。

アマブタ　笠。

サエヘダ　毀れた。

笠が毀れた時には　アニブタ、サエヘデ、コシマエデ、ボチモーシタと言ふ。

ソヨ　簑。

ジナ　雨。

「雨が降る」は　ジナ、ナッツァガル。

スエバラボー　煙管。

クサ　米。

ウデア　酒。デァは（dea）と發音する。

フンメァ　かんじき。メァは（mea）

ナメ　槍。

サエゴグリ　魚。

ボドス　臭れる。やる。

サラエ　鳥。（但し、此れは傳承者も確實でないと言ふ）

ブンベァへら。（飯杓子）。ベァは（bea）

マガリ　杓子。

クマ　鍋。

ナヨ　夜。ナは例の接頭のナ。

「夜が明けた」はゆナニマヤケダ。

サエ　水。（但し、此れは傳承者も確實でないと言ふ）

ユザエ　湯。

ヤマコトバニナル　死。

ムジル　戻る。

マヤケレ　見れ。（「見る」の命令形。「見よ」の意）

マガ　血。

補遺

1　狩には瀬戸物を持つて行つては悪い。

2　アオシシの皮を剝いだ時のマガ（血）をヒヤグヒロに入れ、ヒヤグヒロの口を結んで煮たものをノーヤジと言つて美味いと言ふ。家へも土産に持つて歸る。

3　其の煮汁を袴（麻布製）に塗ると水をはちき、雪もつかないと。

4　獵の時の履物はヒケラと言ふ。アオシシの皮でこしらへた靴である。

5　千縄部落でも、アオシシ狩をスノ山と言ふ。アオシシを取つた時には、鉤になつた柴の小枝を八本折つて其の場に立てる。此れをシシカギと言ふ。

皮を剝ぐ時には、左右いづれかの片足のカンジキを脱いで剝ぐ。――田村龜一郎氏談

三面部落のスノ山のホーゴトや忌詞は、ヤマサギエズノカミと言ふ神樣に敎へられたものだと言ふ。北小國村太皷澤の法印業日光院もヤマサギエズノカミに習つたと言ふ。山形縣北村山郡宮澤村ではヤマサギエズノカミを氏神に祭つて居るとのことである。

あとがき

つたない此の小稿が印刷されて、日の光に曝されるやうになつたことは、押へ切れない喜であると同時に、恥しいやうな、一種のそら恐しさを感ずるのです。紙飢饉の折から、徒にパルプを消費し、印刷インクをむだにするのではあるまいか、そんな氣持がちらちらとかすめるのです。

此の拙稿を書き綴つてゐた年の前年は「未曾有」と言はれた大凶作が、私達の村をも襲つた昭和九年でした。減收五割八分、此れが村農會の發表した數字でした。周圍には多くの驚くべきことを見出しました。しかし、此の胸をうつ現實に目を開きかけた私は、では――と考へる時、今さらながら自分の弱さ（昭和八年の大半を病床に過しました）と無智が私を狼狽させ、暗い氣分にさせました。

その頃でした。村上さん――拙稿が此のやうな物になるのに一ばん御心を配つて下さいました、アチック　ミューゼアムの村上清文氏が奥三面部落に入り、一冬をすごす御計畫とのニュースが地方新聞に出ました。しかし其れはその頃の私の眼を掠め去つた一片の記事でしかありませんでした。

ところが、ふとしたことから、此の未知、未見の村上さんによつて、秋田の吉田三郎氏の寒風山農民手記と柳田先生の民間傳承論とを讀む機會を得ました。それまで知らなかつた此の學問、研究は新しい魅力で引きつける

ものを持つてゐました。

そして十年の七月頃から、憑かれたやうに採集――もう此のやうな術語も知つてゐました――を始め、ワラ紙の切れに書きとめては原稿用紙に整理しました。村上さん在村中にお目を汚して、何かの資料にでも御使ひになるものをと思つてグングンすゝめました。（今考へてみると、未だに惱む頑固な肩こりも、あの夏には氣がつかなかつたやうに思はれます）

その秋、前年に借りた政府米の返還が始まりました。こゝでも、私達の體內に昔から流れてゐる人民の「血」を知りたいと云ふ私の動機は、いよいよ强くされました。私達人民の現在を知り、未來を考へるために、人民の歷史を研究しなければならぬと云ふ主張が身にしみて來ました。

しかし今かうして、ものものしく一冊の書物になる時、私の態度には不純な成心を含ませなかつたつもりですが、採集技術の拙劣、未熟さが心を嚙みます。たとへば、節分の「豆炒」の天氣占が各戸によつて違はなかつたか等の質問を發するやうな聽き手でした。

又、アチック　ミューゼアムの他の多くの刊行物にくらべ、それから、ますます其の確立の度を强めて行く日本民俗學を思ふ時、拙稿は「學」附近の彷徨――とさへも言ひ得ないかも知れません。

もしも此の中から、日本民俗學の若木が更に成長するための肥料素の一滴でも汲み得るものありとすれば、望外の喜であり、且つ、いろ〳〵な材料を忙しい時間をさいて與へて下さいました村の人々、役場農會の方々、出版のための多大な費用と煩雜な仕事とを御引き受けさいましたアチック　ミューゼアムの御厚意にも、いさゝか酬いる所もあらうかと思ふのであります。

昭和十二年十一月

金澤醫大附屬醫院大里內科東一號室にて

丹田二郎

索　引

ア

アオシシ狩 … … … … … … 234
アカ見（赤子見）… … … … … 74
アギ餅 … … … … … … … 62
朝虹… … … … … … … … 114
あさ藤 … … … … … … … 112
足半… … … … … … … … 93
新しい草履を使ひ始める時… … … 113
穴堀（墓穴掘） … … … … … 11
粟島様 … … … … … … … 57
雨乞… … … … … … … … 19
アヤガ … … … … … … … 68
鮎を捕る網（ホエロといふ網）… … 42
アワボー… … … … … … … 53

イ　キ

家の名 … … … … … … … 15
家の間取り … … … … … … 82
筏 … … … … … … … 20, 38
伊勢參りの唄… … … … … … 122
稲荷様 … … … … … … … 55
犬のまぢなひ… … … … … … 121
忌み慎しむ事… … … … … … 121
ゐろりの鉤のハナ… … 110, 112, 116, 121
ゐろりの坐の名稱… … … … … 82

ウ

氏神業 … … … … … … … 12
丑の日 … … … … … … 114, 115
臼ふぎ（搗）唄… … … … … … 134
馬沓 … … … … … … … … 99
厩まつり… … … … … … … 57
漆掻き … … … … … … 16, 33
漆掻き道具 … … … … … … 103

エ　エ

エギアエ神 … … … … … … 123
エギバガマ（山袴）… … … … … 92
エスス（石臼）唄 … … … … … 137
エナミ … … … … … … … 106
エベ様 … … … … 40, 58, 63, 65, 118

オ　ヲ

オカブリ… … … … … … … 88
お刈り上げ … … … … … … 63
オゴジ（水田に居る人を螫す虫）… … 166
オサド様… … … … … … 47, 127
オサドバナシ… … … … … … 18
オサドモドシ… … … … … … 20
お釋迦様の日… … … … … … 58
お精靈様を迎へる馬 … … … … 60
オソカゲ（おそがけ） … … … … 94
オダヤ様… … … … … … … 51
オテカケ盆 … … … … … … 48
お手玉唄… … … … … … … 152
オニドン（棺を擔ぐ人）… … … … 80
オハヤシ… … … … … 16, 19, 239
オビヤゲ… … … … … … … 74
產ダデの飯 … … … … … … 74
オマタギ… … … … … … … 235
お松様 … … … … … … … 45
お松様を迎へる … … … … … 66
オヨネカマ … … … … … … 130

カ

餆餅… … … … … … … … 47
餓鬼… … … … … … … … 116
神樂… … … … … … … … 62
かくれんぼの鬼のきめ方 … … … 116
笠 … … … … … … … … 96

ガタガカ(漁具) … … … … … … 106
カデといふ日… … … … … … … 239
門松… … … … … … … … … 45
火難除け… … … … … … … … 121
蟹をたべぬ家… … … … … … … 120
カニヨ(燒畑)… … … … … … … 36
川狩り … … … … … … … … 18
藁の年越し … … … … … … … 63
神懸り … … … … … … … … 125
棺を擔ぐ人 … … … … … … 78, 80
カンジキ… … … … … … … … 94
願バダヘ… … … … … … … … 124
羚羊狩 … … … … … … … … 234
カラキ倒し(空木倒し)… … … … … 18
獵の履物… … … … … … … … 243
カリ柱 … … … … … … … … 85
カワクソ(川クソ)… … … … … … 19

キ

木をツペアル… … … … … … … 18
粁 … … … … … … … … … 108
木の大きさの格付名 … … … … … 37
木バシ(木判)の種類 … … … … … 21
キシノギのツエダヂ … … … … … 60
木宿… … … … … … … … … 20
木宿の株 … … … … … … … … 20
脚絆… … … … … … … … … 94
九一の年齢 … … … … … … … 116
漁撈用具… … … … … … … … 106

ク

九月の節句 … … … … … … … 62
草分け七軒の傳說… … … … … … 130
口籠… … … … … … … … … 98
區長… … … … … … … … … 8
クヂワリ酒 … … … … … … … 68
組長… … … … … … … … … 8
鍬下し … … … … … … … … 58
クワンダエ(餅花の木) … … … … 47, 53

ケ

ケンビキのまじなひ … … … … … 121

コ

コエブネ(肥舟) … … … … … … 98
コカゲ(足の甲掛け) … … … … … 92
五月の節句 … … … … … … … 59
ゴゲ(腰蓑の一種)… … … … … … 97
コザブシ(子供の雨具)… … … … … 97
コシケダ(雪箒き具) … … … … … 111
小正月 … … … … … … … … 52
小正月團子を刺す木 … … … … … 47
小正月の愼しみ … … … … … … 114
コジリカギ … … … … … … … 19
戸數と人口 … … … … … … … 3
コデ… … … … … … … … … 90
諺 … … … … … … … … … 164
コナガマ(小仲間)… … … … … 11, 80
コナガマ入り… … … … … … … 11
コナガマの者… … … … … … … 78
五人組 … … … … … … … … 9
コハシリ… … … … … … … … 8
コバシリ田 … … … … … … … 9
木挽… … … … … … … … … 31
木挽唄 … … … … … … … … 139
木挽の出稼 … … … … … … … 32
ゴヒン(狗賓)… … … … … … … 18
獨樂… … … … … … … … … 110
コマガタ(駒形のお札)… … 16, 125, 239
コマタギ… … … … … … … … 235
米の糅 … … … … … … … … 87
婚姻… … … … … … … … … 67
婚姻に關する俗信… … … … … … 73
ゴンゲン樣の日 … … … … … … 65
ゴンゾー… … … … … … … … 95
小物成 … … … … … … … … 42
子守唄 … … … … … … … … 146
コワ箒 … … … … … … … … 108

サ

栽培禁忌… … … … … … 42, 117, 119
ザエホリ(漁法の名) … … … … … 106
サガオクリ(坂送り) … … … … … 122
作物を盜まれぬまじなひ … … … … 122
里歸り … … … … … … … … 71
サナブリ… … … … … … … … 60
三月の節句 … … … … … … … 59
サンナエ… … … … … … … … 234
產婦の忌み … … … … … … … 74
座元… … … … … … … … … 161

シ

シオ木伐り … … … … … … … 16
仕事のし始め… … … … … … … 51
七軒の米… … … … … … … … 121
七人酒盛… … … … … … … … 70
シシカギ… … … … … … … … 273
四十二の二ッ兒 … … … … … … 116
死者の着物 … … … … … … … 77
シノボ … … … … … … … … 235
しびれのまじなひ… … … … … … 121
シマ(組)… … … … … … … … 8
シマ入り… … … … … … … … 9
シマ寄合… … … … … … … … 9
仕舞寄合… … … … … … … … 8
ジンベ … … … … … … … … 93
十五夜 … … … … … … … … 62
十五若衆… … … … … … … … 12
十二月(祝木)… … … … … … … 53
正月の仕舞 … … … … … … … 57
正月のノサ … … … … … … … 47
正月松飾の位置 … … … … … … 46
醬油を作らぬ家 … … … … … … 119
職業別戸數 … … … … … … … 5
ジョリ(草履)隱しのサンザのきめ方… 155
シラヅギ… … … … … … … … 125
死靈に關する俗信… … … … … … 80

ス

水泳の時の唱へ言 … … … … … … 156
水死の熊… … … … … … … … 235
水神樣の日 … … … … … … … 64
杉の植林… … … … … … … … 36
煤掃き … … … … … … … … 66
スノ山 … … … … … … … … 234
炭燒… … … … … … … … … 33
炭燒語彙… … … … … … … … 34
ズンギリ(煙草入れ) … … … … … 110

セ

青年團 … … … … … … … … 12
姓の分布 … … … … … … … … 14
節期米搗… … … … … … … … 14
節分… … … … … … … … … 50
節分の豆をまかぬ家 … … … … … 120
センカン蠟燭… … … … … … … 110
センタルタヾギ … … … … … … 49

ソ

葬式の行列 … … … … … … … 78
葬式の次の日… … … … … … … 79
ソーデア(惣代) … … … … … … 8
袖無し … … … … … … … … 89
ソドメ(早乙女)のデタチ(打扮)… … 40
ソラデのまじなひ… … … … … … 120
槌 … … … … … … … … 38, 101

タ

大神樂 … … … … … … … … 161
大黑樣の日 … … … … … … … 65
大黑柱に飾る… … … … … … … 53
大黑舞 … … … … … … … … 56
ダエシコ樣 … … … … … … … 64
田植… … … … … … … … … 53
田植唄 … … … … … … … 113, 131
田植のコビリ… … … … … … … 40

タガキ谷… … … … … … … … 99
薪木伐り… … … … … … … … 16
薪木の棚… … … … … … … … 19
叩き新禱… … … … … … … … 125
建前(たちまへ) … … … … … … 85
種籾水漬の期間 … … … … … … 40
田の神樣の日… … … … … … … 58
田の草取唄 … … … … … … … 133
田の作付面積… … … … … … … 7
田の仕事の日付 … … … … … … 39
卵の殼 … … … … … … … … 113
檀家… … … … … … … … … 12
誕生の餅… … … … … … … … 75
ダンバシラ(山小舍の柱の名) … 16, 239
樽ヨエ … … … … … … … … 68

チ

チカムゲア … … … … … … 71, 73
チジョ團子 … … … … … … … 57

ツ

ツギアエ… … … … … … … … 14
ツグラ … … … … … … … … 108
ツバミを築く時の祝 … … … … 18
ツバミ出し … … … … … … … 18
ツバレ … … … … … … … … 88
ツトメ(本ツトメ・半ツトメ) … … 79

テ

デァハヂの動物 … … … … … … 115
手をぱちぱち打ち合ふ遊びの唄… … 157
手甲… … … … … … … … … 90
テナガシ… … … … … … … … 19
手毬唄 … … … … … … … … 147
天から灯が下る … … … … … … 129
天狗… … … … … … … … 18, 161
テンゴ … … … … … … … … 101
テンデラ… … … … … … … … 98
天王樣の日 …… … … … … 52, 60

ト

ド(釜) … … … … … … … … 106
十日町 … … … … … … … … 51
ドーゲァ(燈壺) … … … … … … 111
童謠… … … … … … … 153, 156, 158
ドーラク神 … … … … … … … 128
年祝い … … … … … … … … 76
年男… … … … … … … … … 43
トシヤ(除夜)… … … … … … … 67
どん屋(鑄掛屋) … … … … … … 133
土用の丑の日… … … … … … … 66
鳥追ひ … … … … … … … … 54
鳥さし … … … … … … … … 161
鳥さし舞… … … … … … … … 161

ナ

ナエカゴ(苗籠) … … … … … … 9
ナガエワムワリ(水乞)… … … … 19
ナガシで轉んだ時のまじなひ … … 115
ナガの節句 … … … … … … … 63
ナガラ … … … … … … … … 235
謎(なず)… … … … … … … … 167
ナダ(鉈)… … … … … … … … 102
納豆る作らぬ家 … … … … … … 120
納豆のトシヤ… … … … … … … 67
ナデ(篠の一種) … … … … … … 108
七草粥 … … … … … … … … 49
七草正月… … … … … … … … 50
七ヅメ … … … … … … … … 113
ナノガビ(七日) … … … … … … 60
苗代桁 … … … … … … … … 98

ニ

ニズリ … … … … … … … … 100
ニハ(土間) … … … … … … … 82
庭掃き … … … … … … … … 64

ネ

ネナギ(根蕨)… … … … … … … 36
ネナギ鎌… … … … … … … … 102
年始物 … … … … … … … … 48
念佛講 … … … … … … … … 11

ノ

ノーヤジ… … … … … … … … 243
野送り … … … … … … … … 78
鋸の種類… … … … … … … … 102
ノサ… … … … … … … … … 47
ノサガケ… … … … … … … … 47
ノサの木… … … … … … … … 127
ノダテ(初田植) … … … … … … 40
ノリ木 … … … … … … … … 19

ハ

バエ… … … … … … … … … 98
バエ木 … … … … … … … … 19
歯固め … … … … … … … … 48
墓に餘をたてる … … … … … … 79
ハガマ(袴) … … … … … … … 91
白米城傳說 … … … … … … … 129
ハゴミ … … … … … … … … 99
箸ウヅシ(箸移し)… … … … … … 113
ハシドリ… … … … … … … … 71
ハダコ(單衣)… … … … … … … 88
畠作の變遷 … … … … … … … 42
鉢卷き石… … … … … … … … 114
初午… … … … … … … … … 58
廿日正月… … … … … … … … 56
廿日盆 … … … … … … … … 61
初ヘヂ … … … … … … … … 71
伐木の運搬・處理… … … … … … 37
初夜詣り… … … … … … … … 13, 124
初寄合 … … … … … … … … 8
初雷… … … … … … … … … 116
ハナエリ… … … … … … … … 124
ハンバキ… … … … … … … … 94
ハヤシ … … … … … … … … 53
早物語 … … … … … … … … 159
針供養 … … … … … … … … 65
春馬… … … … … … … … … 59
春三月の禁忌… … … … … … … 117
春夜籠り… … … … … … … … 13

ヒ

ビグ… … … … … … … … … 101
ヒゴモ(日除けに着る蓑) … … … 97
ヒズズ(辨當携帶具) … … … … 103
日に三度血の流れる澤… … … … 129
ヒハレア(忌晴れ)の膳… … … … 79
ヒヤスミ(畫寢)の期間… … … … 41

フ

深靴… … … … … … … … … 93
フクデ … … … … … … … … 47
フゴ… … … … … … … … … 101
フジカ … … … … … … … … 235
フジョーニチ… … … … … … … 48
フタドコ泊り… … … … … … … 115

ヘ

ヘヂ(夫婦揃つて實家を訪ふ事)… 71, 85
ヘヂの持ち物… … … … … … … 71
ヘナクジ(背中當て) … … … … 100
ヘナクジの刺し方… … … … … 100
蛇を指差した時のまじなひ… … … 115
辨慶の膝の痕… … … … … … 129

ホ

頬冠り … … … … … … … … 88
率公人暇をとる … … … … … … 66
ホーチョー … … … … … … … 235
ホエロ(漁具)… … … … … … … 106
螢を取る時の唄 … … … … … … 156
盆 … … … … … … … … … 61

盆踊唄 … … … … … … … … 143
本家分家の關係(木版にみられる) … 22

マ

マオ鳥の巣を見た時 … … … … 117
枕團子 … … … … … … … … 76
孫祝… … … … … … … … … 74
鱒を取ると悪い所… … … … … 115
マヅダガ(祝儀の唄) … … … … 142
萬雜割 … … … … … … … … 10
豆焼… … … … … … … … … 50

ミ

ミゴ(巫女) … … … … … … … 128
巫女の口寄せ… … … … … … … 79
味噌玉の數 … … … … … … … 118
ミチカハダコ… … … … … … … 88
三日どろゝ … … … … … … … 48
三日の湯… … … … … … … … 74
三ツ辻 … … … … … … … … 114
ミヅメの酒盛… … … … … … … 71
蓑 … … … … … … … … … 95
ミノルカ… … … … … … … … 236
ミバンゲ泊り… … … … … … … 114
耳フクギ… … … … … … … … 114

ム

聟入り … … … … … … … … 71
聟嫁がそろつて實家へ行く日 … … 71
ムナマヤデ … … … … … … … 89
棟上げ … … … … … … … … 85

メ

メツケアチケア(眼病の一種)
　のまじなひ… … … … … … … 123
メンツ(辨當用具)… … … … … … 103

モ

モジナ(幣)のいたづら… … … … 18
モドリン(木挽の元リン) … … … 31
ものがたり … … … … … … … 159
籾かぢ唄… … … … … … … … 134
モヽフギ… … … … … … … … 91
モレモレ(ものもらひ)のまじなひ … 120

ヤ

燒魚を貰つた時 … … … … … … 113
燒畑の種類 … … … … … … … 36
藥鄙籠り… … … … … … … … 124
屋敷取り… … … … … … … … 81
野生食用植物… … … … … … … 86
ヤソ樣 … … … … … …16, 57,123,125
ヤツコ … … … … … … … … 161
ヤツコガシ … … … … … … … 50
ヤド豆 … … … … … … … … 20
築 … … … … … … … … … 117
屋根に煙出しをつけぬ家 … … … 120
ヤヘンマ… … … … … … … … 101
ヤマ言葉… … … … … … … … 24, 240
山小屋 … … … … … … … … 16, 237
ヤマサキ… … … … … … … … 38, 236
ヤマサギエズノカミ … … … … … 243
ヤマシ(山師)… … … … … … … 31, 83
山の神 … … … … … … … … 58. 238
山の神樣の日… … … … … … … 63. 66
山の神の祠 … … … … … … … 127
山の神樣の嫌ふ事… … … … … … 18
山の借り賃 … … … … … … … 10
山の地名… … … … … … … … 23
ヤマ餅 … … … … … … … … 18, 239

ユ

雪靴… … … … … … … … … 93
雪で倒れた木を起す … … … … … 36
湯灌… … … … … … … … … 77
夢占… … … … … … … … … 118

ヨ

ヨエリ(結納)… … … … … … … 68
夜籠り … … … … … … … 13, 124
よ縄… … … … … … … … … 112
嫁入唄 … … … … … … … … 141
嫁入の行列 … … … … … … … 69
ヨリエア(寄合) … … … … … … 8

ワ

若木迎へ… … … … … … … … 47
若水… … … … … … … … … 45
若レンジョ(若連中) … … … … … 12
ワタゴ … … … … … … … … 89
渡邊の綱の子孫 … … … … … 15. 120
藁靴… … … … … … … … … 95
草鞋… … … … … … … … … 93
藁仕事の一日の量… … … … … … 41
童言葉 … … … … … … … 154, 156

リ

リン(木を挽く鋸)… … … … … … 31

(終)

昭和十三年十二月二十五日印刷
昭和十三年十二月三十日發行

越後三面村布部郷土誌
定價 金貳圓參拾錢

著者 丹田二郎
發行者 東京市芝區三田聞町十番地 瀧波寛雅
印刷者 東京市京橋區銀座西二丁目五番地 森利衛
印刷所 東京市京橋區銀座西二丁目五番地 森彩雲堂印刷所
發行所 東京市芝區三田聞町一〇 アチックミューゼアム 東京市東京市ヒ人間セ〇番

發賣所 東京芝區三田二一 丸善株式會社三田出張所 振替東京一八九九五 電話三田一一一二七六

アチツク ミユーゼアム 刊行書目

○アチツク ミユーゼアム彙報

〔第一〕 早川孝太郎校註
愛知縣北設樂郡下津具村
村松家作物覺帳
〔本文菊版一六八頁・圖版及圖表一七圖・地圖・索引〕
定價 壹圓五拾錢 送料拾四錢

〔第二〕 竹內利美編
小學生の調べたる
上伊那川島村鄉土誌
〔本文菊版二一〇〇頁 圖版七三圖・地圖・索引〕
定價 壹圓八拾錢 送料拾四錢

〔第三〕 武藤鐵城著
羽後角館地方に於ける
鳥蟲草木の民俗學的資料
〔本文菊版三七〇頁 圖版二圖・地圖・索引〕
定價 壹圓八拾錢 送料拾四錢

〔第四〕 吉田三郎著
男鹿寒風山麓農民手記
〔本文菊判一八二頁 圖版二四圖・地圖・索引〕
定價 壹圓五拾錢 送料拾四錢

〔第五〕
高橋文太郎著
武藏保谷村鄕土資料
〔本文菊判二〇二頁 圖版四七圖・地圖・索引〕
定價 貳圓五拾錢 送料 拾四錢

〔第六〕
内田武志著
靜岡縣方言誌
分布調査 第一輯 動植物篇
〔本文菊判二七〇頁 方言分布地圖・五葉 (動物六二項目・植物二八項目)〕
定價 參圓八拾錢 送料 拾四錢

〔第七〕
竹内利美編
小學生の調べたる
上伊那川島村鄕土誌續編
〔本文菊判二二五頁 圖版二三圖・地圖・索引〕
定價 貳圓八拾錢 送料 拾四錢

〔第八〕
知里眞志保著
アイヌ民俗研究資料 一
〔說話第一〕
〔内容 本文菊判 原文一三頁 譯文二七頁〕
定價 七拾錢 送料 參錢

〔第九〕
アチック ミューゼアム編
所謂足半(あしなか)に就いて
(近刊)

〔第一〇〕
稻塚和右衞門著
木實方祕傳書
雲落櫨樹植林製蠟手記
〔本文菊判一五四頁 圖版一七面・地圖・語彙〕
定價 壹圓七拾錢 送料 拾四錢

〔第一一〕
宮本常一著
周防大島を中心としたる
海の生活誌
〔本文菊判三〇六頁・圖版四一圖・寫眞三葉・地圖・索引〕
定價 貳圓八拾錢 送料 拾四錢

〔第一二〕
山口和雄著
九十九里舊地曳網漁業
〔本文菊判三三五頁・圖版十七圖・地圖・索引・別表 菊判全紙大一・半截大二〕
定價 參圓 送料 廿二錢

〔第一三〕
進藤松司著
安藝三津漁民手記
〔本文菊判三三八頁・圖版寫眞二二圖・凸版三〇圖 索引・別刷地圖四葉〕
定價 參圓 送料 廿二錢

〔第一四〕
内田武志著
靜岡縣方言誌
分布調査 第二輯 童幼語篇
〔本文菊判一九六頁 方言分布地圖二葉 (童語篇一八。幼語篇一〇七。童戲篇六)〕
定價 貳圓參拾錢 送料 拾貳錢

〔第一五〕 アチック ミューゼアム編
狩獵古記錄二篇
（近刊）

〔第一六〕 吉田三郎著
男鹿寒風山麓農民日錄
〔本文菊判四七〇頁 寫眞五〇圖附錄一〇〇頁〕
定價 參圓六拾錢 送料 拾四錢

〔第一七〕 知里眞志保著
アイス民俗研究資料 二 謎・口遊び・唄
〔本文菊判一三五頁 謎以下十八項目〕
定價 九拾錢 送料 拾錢

〔第一八〕 祝宮靜考註
江州野洲川簗漁業史資料
〔本文菊判二三八頁・圖版一三圖・地圖・語彙〕
定價 貳圓五拾錢 送料 拾四錢

〔第一九〕 佐藤三次郎著
北海道幌別漁村生活誌
〔本文菊判二二二頁 寫眞二一圖・索引〕
定價 貳圓五拾錢 送料 拾四錢

〔第二〇〕 澁澤敬三編著
豆州內浦漁民史料 上卷
〔本文菊判五六四頁 圖版二四圖〕
定價 八圓 送料 貳拾貳錢

〔第二一〕 船遊亭扇橋著
復刻 奥のしをり
〔本文菊判一〇二頁附錄四〇頁・圖版・地圖〕
定價 壹圓九拾錢 送料 拾四錢

〔第二二〕 丹田二郎著
越後三面村布部鄉土誌
〔本文菊判二四六頁 寫眞二〇圖・地圖・索引〕
定價 金貳圓參拾錢 送料 拾四錢

〔第二三〕 宮本常一著
河內國瀧畑左近熊太翁舊事談
〔本文菊判三〇六頁 圖版二二圖〕
定價 貳圓六拾錢 送料 拾四錢

〔第二四〕 澁澤敬三編著
豆州內浦漁民史料 中卷之壹
〔本文菊判六八四頁 圖版一〇圖〕
定價 七圓 送料 貳拾貳錢

〔第五二〕 内田武志著
靜岡縣方言誌
分布調査 第三輯 民具編
〔本文菊判三八六頁 附圖・二葉〕
（近刊）

〔第六二〕 小野武夫編著
宇和島藩 吉田藩
漁村經濟史料
〔本文菊判一四三頁 圖版三六圖〕
定價 貳圓 送料拾錢

〔第七二〕 愛媛縣北宇和郡役所
宇和島藩漁村經濟史料補遺
〔本文菊判二〇〇頁〕
定價 貳圓 送料拾錢

〔第八二〕 拵嘉一郎著
喜界島農家食事日誌
〔本文菊判一四六頁 附錄五〇頁・寫眞六圖〕
（近刊）

〔第九二〕 アチック ミューゼアム編
社會經濟史料雜纂
〔本文菊判一二一頁 寫眞六圖〕
定價 八拾錢 送料拾錢
（內容—別刷御國・小前ノ時文・鼎號古渡付箱輸・常州小菅村煙草上帳・常州六斗蒔煙草上帳・越中新川郡寺公入仕方帳・薩州中野村大豆賣方覺記）

〔第〇三〕 鹿野忠雄著
臺灣紅頭嶼寫眞帳
〔菊倍判アート紙五〇〇頁 寫眞千二百餘枚收輯〕
（近刊）

〔第一三〕 山口和雄著
越中灘浦臺網漁業史
（近刊）

〔第二三〕 アチック ミューゼアム編
社會經濟史料雜纂
第二輯
（近刊）

〔第三三〕 澁澤敬三編著
豆州內浦漁民史料
中卷之貳
（近刊）

〔第四三〕 アチック ミューゼアム編
鹽俗資料
（近刊）

○アチツク ミユーゼアム ノート

〔第一〕 アチツク ミユーゼアム編
民具問答集
〔本文菊別三一九頁 項目一二〇。各項毎ニ寫眞ヲ附ス。地圖・索引 附錄 民具蒐集調査要目〕
頒布價 金貳圓五拾錢 送料拾四錢

〔第二〕 山口和雄著
内房北部の漁業と漁村經濟 明治前期を中心とせる
〔上 本文菊判六二頁・地圖 不二頁・索引 本文菊判五〇頁・寫眞〕
頒布價 各 金五拾錢 送料各六錢

〔第三〕 櫻田勝徳・山口和雅著（隱岐調査報告一）
隱岐島前漁村採訪記
〔本文菊判一八三頁 寫眞二圖・地圖・索引〕
頒布價 金壹圓五拾錢 送料拾錢

〔第四〕 櫻田勝徳著（隱岐調査報告二）
糸滿漁夫の聞書
〔本文菊判三十二頁 寫眞一頁・糸滿語彙〕
頒布價 金參拾錢 送料三錢

〔第五〕 櫻田勝徳・山口和雄著 美保關・廣島三津・伊豫大三島
漁村採訪記
〔本文菊判二一頁 地圖〕
頒布價 金參拾錢 送料三錢

〔第六〕 岩倉市郎著
喜界島調査要目
〔本文菊判一二頁〕 （非賣品）

〔第七〕 アチツク ミユーゼアム編
民具蒐集調査要目
〔本文菊判一六頁 圖版四面〕 （非賣品）

〔第八〕 櫻田勝徳著（土豫漁村採訪旅行報告一）
伊豫日振島に於ける舊漁業聞書
〔本文菊判六四頁 地圖〕
頒布價 金五拾錢 送料六錢

〔第九〕 櫻田勝徳著（土豫漁村採訪旅行報告二）
土佐四万十川の漁業と川舟
土佐漁村民俗雜記
〔本文菊判五五頁 地圖・送料〕
頒布價 金五拾錢 送料三錢

〔第一〇〕 伊豆川淺吉著（土豫漁村採訪旅行報告三）
土佐鰹漁業聞書
〔本文菊判五三頁 地圖〕
頒布價 金五拾錢 送料三錢

〔第一一〕 藤木喜久麿著
新島採訪錄
〔本文菊判五〇頁 寫眞二十四圖・地圖〕
頒布價 金八拾錢 送料三錢

〔第一二〕 高橋文太郎著
秋田マタギ資料
〔本文菊判九〇頁 寫眞二三圖・地圖・索引〕
頒布價 金壹圓參拾錢 送料六錢

〔第一三〕 金子總平著
南會津・北魚沼地方に於ける
熊狩雜記
〔本文菊判七六頁 寫眞一二圖・地圖・索引〕
頒布價 金壹圓 送料六錢

〔第一四〕 アチック ミューゼアム編
北部多島海巡航備忘錄
（近刊）

〔第一五〕 アチック ミューアム編
蔚山邑達里農村見聞錄雜纂
（近刊）

〔第一六〕 岩倉市郎著
薩州山川ばい船聞書
〔本文菊判三二頁 寫眞二圖〕
頒布價 金四拾錢 送料六錢

〔第一七〕

〔第一八〕

〔第一九〕

〔第二〇〕

エト X 49